

# 「アインシュタイン・ショック」

はせ ひろいち

## ◆登場人物◆

石原 純  
桑木 或雄  
寺田 寅彦  
田辺 元

荒木 俊馬（京大学生）  
常川 昭二（京大学生）  
宮崎 登美子（京大学生）

キョウコ  
ナツエ  
ケンタ  
山崎先生

A・アインシュタイン

## 【SCENE / 1】

大小様々な黒板に囲まれた夜の教室。中央に大きな机。なぜか年号と月が書いてない日めくりカレンダーには「9」の文字だけ。奥から白い服を着た女（キョウコ）が登場。手には如雨露、頭には古ぼけたソフト帽を被っている。如雨露を机に置き、帽子を手に取りクルクル回す。やがて意味深に壁にかけ、窓辺の鉢植えに水を注ぐ。ややあつて、手前の廊下から、人影。コートの際を立て、顔はよく見えない。人目を忍んでやってきたアインシュタイン博士（以下ES）である。

ES（独語で）…あの…お嬢さん…

キョウコ ……（手を止めるが振り返らず）

ES（独語で）ちよっとお尋ねいたしますが…

キョウコ ……

ES（独語で）ああ、そうか…（日本語で）コンニ、チワ…

キョウコ（控えめに会釈する）

ES ワタシ、ニホンノ、コトバ…

壁にかけた帽子を取り、足早に博士に手渡すキョウコ。

ES（独語で）おー、これこれ。これ、私のです。やはりココに…ああ、失礼…えっと…

キョウコ（手振りで制す）

ES（独語で）何か？

キョウコ（ポケットから小ぶりの石を取り出し）アイン…（宙に投げて再びキャッチして）シュタイン？（手渡す）

ES（独語で）おー。（微笑み受け取って、日本語で）。ドウモ、アリガト。

キョウコ（独語で）お急ぎください博士。まもなくココに人が来ます。

ES（独語で）おーそれはますい。では、また。理知的な娘さん。

キョウコ ユーアーウエルカムですたい。

ES（独語で）えっと…？

キョウコ どうか、お急ぎを。（独語で）お急ぎを。

ES（独語で）ああ。

去り際、日本風のお辞儀をするES。応えるキョウコ。足早に去る

ES。見送り鉢植えに戻るキョウコ。やがて、大あくびをしながら少年（ケンタ）入室。やはり白い服。昼の明かりに。黒板にはいろいろな数式や図形、伝言やいたずら書きが書かれている。

ケンタ ちーいっす。

キョウコ おはようさん。

ケンタ いやあ、まいったまいった。

キョウコ また寝坊？

ケンタ 違うって。駅前でね、店の親父と勤め人が取っ組み合いの喧嘩してて

ね、思わず見物してたら一本乗り過ごしちゃって。

キョウコ どうせ無賃乗車でしょ？

ケンタ あ、そういうこと言う？ だって最近の列車はやっぱ早いからね。

何？ 速度だっけ？

キョウコ 速度。

ケンタ ああ、それぞれ。風に乗るよりずっと早いから。何より疲れないし。

キョウコ そうやってヒトは墮落していくんだってよ。

ケンタ えっ？

キョウコ 後戻りできないからねえ。特に便利さの美酒からは。

ケンタ 誰？ 宮沢賢治？

キョウコ まさか……ナツエは？

ケンタ や、会ってないけど……

授業開始のチャイム。着席準備をする2人。チャイム終わりがけに登場する中年の男（＝山崎先生）。

キョウコ 起立。

ケンタ 礼。

この間にダッシュで入室。自分の椅子に座る少女（＝ナツエ）。

ナツエ 着席。

動揺を隠し、最高の笑顔で澄ましているナツエ。

山崎先生 ……お早うございます。

3人 お早うございます。

山崎先生 えっと……これだけかな？

ケンタ はい。ダイゴは昨晚旅立ちました。

山崎先生 ああ、そっか。見送ってやったの？

ケンタ ええ、東の運河まで。

山崎先生 そう。ま、彼は根っからの元氣者だから、向こうへ行っても大丈夫でしょう。

ケンタ はい。

山崎先生 さてと……じゃあ今日から新しい単元に入るわけで……（資料なんかをめくって）……

ナツエ おはよ。

キョウコ おはよ。

黒板に進み「E = mc<sup>2</sup>」の表記部分を刺す山崎先生。

山崎先生 イーイコールエムシーのじじよう。はい。

3人 イーイコールエムシーのじじよう。

山崎先生 さて、何のことだか判るかな？

ナツエ はい。

山崎先生 おお、ナツエ君。

ナツエ エムシーってのはマイクの略ですね。転じて、よくクラブなんかでDJがやってたり、流行歌の前に日本語なのに外人みたいに喋って雰囲気盛り上げたりする人の総称です。こういう人は日本人なのにニックネームを持つています。例えばカールとかジャクソンとか。本名はヤスオとかゴンゾウ

なのに、です。

ケンタ え、じゃあMCの後のジジョウってのは？

ナツエ だから、それはジョージの間違えなんですね。ジジョウじゃなくてM

Cジョージ。

ケンタ ああ、なるほど。

山崎先生 じゃあ、Eは？

ナツエ それはもう、「最高」とか「すんごい」って意味です。

ケンタ つまり……MCのジョージは最高だぜっ。

ナツエ そうそう。

山崎先生 違います。

ナツエ がーん。

キョウコ はい。

山崎先生 うん。キョウコ君。

キョウコ 20世紀が生んだ天才物理学者・アインシュタイン博士による数式です。Eはエネルギー、mは質量、cは光の速度を示します。

山崎先生 その通り。さすがはキョウコ君。ちなみに二乗というのは、ココで

言えは  $c$  すなわち光の速度を掛け合わせるコト。  $c \times c$  となるわけだ。

ナツエ あの先生。

山崎先生 何？

ナツエ 既にケンタが：

山崎先生 あ、おい、ケンタ。

ケンタ あ、すいません、ちよつと気を失ってました。

山崎先生 早いだろ、いくら何でも。

ケンタ すいません。

山崎先生 起きててくれよ。これ以上の数式は登場しないから：（客視線）

3人 （客視線）

山崎先生 （微笑んで）多分：

3人 （微笑んで）……

山崎先生 （ケロッと戻って）まあいい：今日からの授業の主人公は、1922年にノーベル物理学賞を受賞したアルバート・アインシュタイン。名前ぐらいは知ってるだろ？

3人 ほうい。

山崎先生 彼は相対性理論という全く新しい理論を発見し、やがてそれが日食にまつわる観測実験で証明され、一躍世界的な大天才としての名声をモノにしたわけだ。

キョウコ イギリスの天文学者アーサー・S・エディントンの観測ですね。つまり、太陽の重力によつて空間が歪むことがわかった。これによりアインシュタインの机上の発明による3つの予言の2つまでが実証されたことになったのさ……（不満顔のナツエ達に）や、つまりね、平たく言えば太陽の陰になつて見えないはずの遠い星が、空間の歪みによつて観測できたんだよ。しかも、その歪みの角度すらアインシュタインが予測した数値に究めて近い値だった。

ケンタ 空間が歪むの？

ナツエ そもそも何で日食なのよ。

キョウコ それは：まだ当時の設備では太陽が出てるときには眩しすぎてデータが取れなかったからだよ。

ケンタ 何で太陽なのさ。月なら眩しくないじゃん。

キョウコ 残念ながらお月様では役者不足だった。太陽ぐらいの強い重力があつて始めて観測される歪みだったからね。

ケンタ ああ、そうかあ（微塵も判ってない）……

キョウコ つまりね。それまでは物理の常識として、絶対的だった光の性質や、時間の概念を、あくまで観察者の相対的な現象として……

山崎先生 （咳払い）

キョウコ あ：すいません。

山崎先生 私も喋りたい。

3人 ……どうぞ。

山崎先生 や、キョウコ君の勉学熱心には驚かされるが：今ココで理論物理学の講義をするつもりはない。

キョウコ え、そうなんですか？

ナツエ 少し安心。

ケンタ すんごく安心。

山崎先生 実は世紀の大天才・アインシュタインとこの国は、特別な関係にあつたんだなあ……

ケンタ 特別な関係？

ナツエ 怪しい関係？ あ、実は愛人が日本女性だったとか？

山崎先生 そうじゃない。1922年、すなわち大正11年。彼は年の瀬迫るこの国を訪問してるんだよ。

ナツエ え、日本に来てるの？

キョウコ ……

山崎先生 そして何と、他のどの国でもこなしてない様な日程、すなわち都合43日間も滞在し、全国各地で講演巡業をしているんだ。

ケンタ それって結構すごいじゃない？

山崎先生 ちなみにエルザ夫人も同行でね。

ナツエ なあんだ、じゃあラブロマンスは期待薄かあ……

山崎先生 彼女はアインシュタイン博士の2番目の奥さんだ。最初の結婚相手は彼と同じ物理学者で、まあ、あまり良いパートナーではなかったと言われている。もちろん助手としては有能だったんだろうが、まあ、何だ？ 人生の理解者としてはね。

ナツエ やっぱ深いわね。男女の機微は。

ケンタ ……（キョウコに）機微って何？

キョウコ 40日間に及ぶ船旅の間にノーベル賞受賞の報告を受ける。そして大正11年11月17日。デモクラシー華やかなる日本は神戸の港に来日し

た博士夫妻は、今の東大、いわゆる東京帝国大学での連続講義を含み、仙台、名古屋、京都、大阪、神戸、福岡の7都市にて一般講演、巡業。

**ケンタ** すんげえ記憶力。

**山崎先生** そう…やっぱりそこまで予習済みでしたか…

**キョウコ** え、先生…

**山崎先生** では、そろそろゲストの面々にご登場いただく。まずは、日本人として初めてアインシュタイン氏に会った人物、そして何より来日中の数々の場面で博士と行動を共にした、桑木或雄教授だ。

舞台美術の極めて不条理な場所から、悪びれず登場する桑木或雄。

**桑木或雄** どうも、桑木です。

**ナツエ** …なんか、いきなり不条理な登場ねえ…

**ケンタ** 不条理というか、むしろ理不尽。

**山崎先生** ええっと…貴方は氏の来日から遡ること13年前、いきなり博士の職場を訪問されたんですよね？

**桑木** (あくまで客視線で) ああ、はい。あれは明らかに若気の至りでしたね。

旅行ついでにフラリと、紹介状も何も持たずに訪問したんです。当時、博士はまだ大学からお呼びが掛からず、スイスのベルンで特許局の仕事をされている公務員でした。

**ナツエ** へえ。公務員しながら研究をしたの？

**桑木** 門前払いを食らっても不思議ない不躰な訪問に、嫌な顔一つせず、私を町に誘い、カフェで論議を交わしました。昼食を挟んで午後にはお宅に招かれました。

**ナツエ** 人の話聞いてないし。

**ケンタ** 大体、誰に向かって喋っているんだ？

**桑木** 「自分は結婚しているからココで昼食を共にすることは出来ない。自宅

へ案内しても良いが不意の客で妻を煩わせたくもない」とおっしゃりました。既に欧州では男女同等の生活観が根付いているのだなあ、と関心している私に、昼飯の予算を尋ねられ、値段の割りに美味しいというレストランを道案内までしてもらいました。

**ケンタ** 話し出すと止まらないタイプだな。

**桑木** まさにそうなんです。

**ケンタ** えっ？

**桑木** 午後も私は全くの聞き役でした。博士は、日本をはじめ東洋文化への関

心にはじまり今の特許の仕事やら、ドイツの学者とは一切交流が無いことなど、実に穏やかに話されました。

**ケンタ** だからこっちを向いて喋れよ。

**ナツエ** 仕方ないから少し明かりでも絞ってやれ。

桑木一人に絞った明かりが入る。明らかに嬉しそうな桑木。

**桑木** 話題の中心は昨今の物理学の現状になり、数学者のアブラハムに始まり

ヘルツ、マツハ、カント…それぞれの研究姿勢に敬意を払いながら、論理に關しては的確な批判的感想を加えていくんですね。そうそう、当時の私が師事していたにはベルリン大のプランク教授だったのですが、博士は彼に關してもいろいろ尋ねられました。彼はどんな人物だったかね。

**キョウコ** マックス・プランク。

明かりが前のそれに戻る。以下、同様の変化。

**桑木** あれ？ ちよつとお待ちくださいね…(動きを止める)

**キョウコ** マックス・プランク。ドイツ科学界の重鎮で、後にドイツ国内では唯一アインシュタイン氏の理解者となり彼をベルリン大学に招聘もする。

**ナツエ** へえ、そうなんだあ…

**桑木** (動きを再開し) ああ、失礼…そして私が大学に戻ると、今度はプランク教授が矢継ぎ早に聞くんです。彼はどんな人物だ？ ユダヤ人なんだって、って…

**山崎先生** むろん。

**桑木** ちよつとお待ちくださいね…(動きを止める)

**山崎先生** むろんプランク博士は研究に人種差別を持ち込むような小さな男ではなかった。その後も彼とアインシュタインは生涯友人でありライバルでもあった。因みにプランク博士は「量子力学の父」とも呼ばれている。

**キョウコ** 相対性理論と量子学…20世紀の2大論理…

**桑木** (動きを再開し) 失礼…ああ、後ですんねえ…

**ケンタ** あれれ？

桑木 …ちよつとお待ちくださいね…（動きを止める）

山崎先生 どうした？ ケンタ。

ケンタ さつきから変だよ。「待ってくれ」と言ったのはこのおっさんなのに、

まるでこつちが待たせてるみたい。

山崎先生 いいところに気付いたね。もしかしたら、それはナツエ君が彼に当

たつてる「光」を操作したからかも知れないね。

ナツエ えっ？ 私のせい？

キヨウコ これも相対性のなせる技ですか？

山崎先生 いささか不条理めいてはいるけどね…ま、でも、せっかく彼が与えてくれた時間だから、少し補足説明しておこう。…桑木氏が訪問したこの年、アインシュタインは30歳。特許局に勤め7年目という恵まれない生活だったが、既に4年前、26歳の時に世間をあつと言わせた特殊相対性理論を発表している。

キヨウコ いわゆる「奇跡の年」ですね？

山崎先生 そう。1905年、博士は僅か3ヶ月のうちに「光子仮説」「特殊相対性理論」「ブラウン運動理論」の3大論文を書いている。

ナツエ 全然判らんけど、何だか凄い。

山崎先生 アインシュタイン氏の名声は役人の頃から既に知れ渡っていたからね。彼の職場にいろんな学者が訪れて、賛辞を述べた後、必ず「それで、実験室はどこですか？」と尋ねる。彼はおもむろに自分の引き出しを引いて見せた。強いて言えばココですねって意味だな。

キヨウコ つまり、いわゆる思考実験ですね。

山崎先生 アインシュタイン16歳の時、彼は頭の中で、自分が光と同じ速度で飛行している姿を空想し、それが相対性理論の発端だったとも言われている。もともと思考実験が得意技だったんだらうけど、ある意味、有形無形のユダヤ人迫害による、恵まれない環境が、彼の沈黙と脳みその中の無限の実験室を育んだのかも知れないね。

ケンタ 沈黙せよ。そして思考せよ。

山崎先生 うん。もしかしたら今の人類が一番忘れかけている事かもな。

ナツエ もしかしたら今の今日の授業のテーマ？

ケンタ ありがたさが一気に増したね。

ナツエ じゃあ、この動かないおっちゃんも何かの大発明をする直前かな？

キヨウコ （専門書を見ながら）いや、彼はそういうタイプではないようね。

むしろ幅広い科学概論や認識論の学者として評価されている。

山崎先生 そう。アインシュタイン理論を翻訳していち早く日本に紹介したのも桑木氏だ。そして、彼はその慎重な研究姿勢を称して「歌わぬ物理学者」とも呼ばれている。

ナツエ カラオケが苦手なのね。

ケンタ もっぱらタンバリンで盛り上げるタイプ？

山崎先生 や、そうじゃなくて…

キヨウコ いわゆる論文を精力的に書いて自分を世間に売り込んでいくタイプではないって事ですね。

山崎先生 そう。特に博士の帰国後は、科学史の編纂なんかで功績を挙げている。まあ、逆に言えば、彼も、アインシュタイン氏という才能に出会い、自分の本分を嗅ぎ取ってしまった一人なのかも知れないね。

ナツエ ある意味、それが彼のアインシュタインショックなのね。

山崎先生 まあ、でも、若気の至りとはいいえ、彼の行動がプランク博士とアインシュタインを出会わせたとと言えるわけで、その功績は大きいな。何せ二大論理の当事者を引き合わせたんだから。一種の才能かもな。

ケンタ じゃあ桑木のおっちゃん、出番はコレで終わり？

山崎先生 いやいや、彼はアインシュタイン来日の頃は九州大学の権威だったにもかかわらず神戸で博士を出迎え、その後東京まで同行している。そして最後の九州講演で出迎え、帰国の際は門司港で船を見送っている。まだまだ登場する権利は持っているはずだが…ああ、確かに少し影が薄いなあ…

見れば確かに桑木への明かりが照度を落としている。

キヨウコ もしかして先生。

山崎先生 何？

キヨウコ 先生が今ののように、ベラベラ紹介すればするほど、出番は減るんじゃないでしょうか？

山崎先生 え？…ああ、そうかあ…

ナツエ 自分で喋りたかったらうねえ。

ケンタ あ、また影が薄くなってる。

その通りに一段と絞られている桑木への明かり。

桑木 ……

ナツエ とはいえそのくせ結構粘ってるよね。

山崎先生 じゃあ、ココで先回の授業の復習だ。

ケンタ わ、抜き打ちテスト？

山崎先生 ブラックホールの話を覚えてる？

ナツエ ああ、あれでしょ？ 極端に重い自分の質量によって、回りの全てを

飲み込んでしまう宇宙の黒い巾着袋。

ケンタ 過食症の成れの果て。

山崎先生 彼はまさに暗闇に飲み込まれる寸前の姿だ。

ナツエ なんとも不吉なたとえ話ね、桑木さんにとっては。

キョウコ そうか、コレも相対性理論なんですね。

ナツエ え？ どういうこと？

キョウコ ブラックホールに凄い勢いで吸い込まれる彼の体には、同時に重力

も加速度的に掛かってきます。重力が強くなればなるほど、彼の時間はゆっ

くり進み、まさに墜落する瞬間は、まるで入り口で止まっているように見え

るはず。

山崎先生 さすがはキョウコ君。

ナツエ え？ 急激に吸い込まれているのに、止まっているの？

山崎先生 や、そうじゃない。落ちていく本人は一瞬のうちに吸い込まれる。

少なくとも彼の時間ではそれが事実だ。でも観測者、つまり彼を見ている僕

たちからは、ホールに落ちる寸前、彼はいつまでも入り口に凍り付いている

ように見えるわけだ。時間は絶対的なモノじゃなく、環境によって値が違う、

相対的なモノだから。そうだねキョウコ君。

キョウコ はい。

ナツエ うーん。判ったような判らんような……

ケンタ じゃあ、このままココに居続けるの？ 桑木のおっちゃん。

ナツエ 結構迷惑な場所だな。

山崎先生 それは簡単。観測者であるナツエ君が目を閉じればいい。

ナツエ あ、そうか。どれどれ。

変な効果音と共に舞台暗転。暫しの間。明転すると、無情にも桑木は消え、代わりに窓際に一人の男（石原純）が立っている。石原

は固まらず、窓辺で適当に振舞っている。

ケンタ あ、消えた。

山崎先生 やっとプロローグが終わったな。

キョウコ 先生。

山崎先生 何？

キョウコ このままのペースで進んだら、とても……

山崎先生 うん。そう思って話の速度に一振りスパイスを振りかけておいた。

キョウコ じゃあ、ほんの少しの加速度を？

ケンタ 等速運動が長かったからな。

ナツエ 特殊相対性理論から一般相対性理論へ。

ケンタ いわゆるテンポアップでんな。

ナツエ あ、誰か来てる。

山崎先生 では諸君、紹介しよう。2番目にアインシュタインに会った日本人。

そして仙台を除く全ての講演地で独語通訳を授かった、石原純元東北大教授

だ。彼もまた博士の日本縦断に、ほとんどの行程で同行している。

拍手をする面々。一瞬空耳を聞いたようなり反応だが、基本的には絡まない石原。窓際の、フラスコに残ったコーヒーの匂いを嗅いだりしながら、アルコールランプで温め直す。

ケンタ ……どうやら彼は明かりを変えなくて良さそうだな。

ナツエ でも今確か「元教授」って……

山崎先生 ああ、うん。

キョウコ それに仙台講演って東北大ですよ……何で馴染みのあるはずの

大学に限って、わざわざ通訳しなかったんです？

山崎先生 ま、その辺りは後のお楽しみって事で……

キョウコ はあ……

山崎先生 彼は、スイスのチューリッヒで半年間、実際にアインシュタインの

ゼミに参加し、研究にも参加している。訪日の9年前だね。

ナツエ 確か、短歌を詠む歌人でもあったんでしょ？

キョウコ （資料を見ながら）「カスター二の 並木まぶかき 夜のみち 人はたからかに かたりゆくも」

山崎先生 うん。工科大学の並木道の風景だね。博士は会うといきなり「輻射はやっぱり量子的関係に支配されているね」と話しかけ「見たまえ。チューリップの空はこんなに美しいではないか」と天空を指差したそうだ。

ケンタ 先生、また説明しすぎ。  
山崎先生 おっと、そうだね……どうやら彼は独白するタイプではなさそうなので、しばらく外から観測しよう。

ナツエ 黙ってなくちやいけないの？  
山崎先生 まあ、多少の絡みは影響ないだろうが……あまり邪魔はしないように3人 ほしい。

舞台奥から白衣を着た女子大生（＝宮崎登美子）が入室。

宮崎登美子 ああ……どうも……

石原純 こんにちは。勝手にお邪魔しています。

登美子 はあ……

石原 学生さん？

登美子 あ、ええ。3回生です。

石原 女性は一人？

登美子 あ、いえ。同期はもう一人。あ、ただ工学系ですが……

石原 そう。さすが関西は進んでるなあ。いやあ、学びの心は男女平等だからね。これからは大いに羽ばたいてもらわないと。

登美子 はあ……あの、失礼ですが……

（男の声） やっぱ最初の温度設定で狂ったんじゃないかなあ……

やはり白衣を着た学生（＝常川昭二）が、手にしたデータを見ながら入室。

石原 いいねえ、共同研究かあ、うらやましいなあ。

常川昭二 あ、どうも……（登美子を見る）

登美子 （微かに首を振る）

石原 田辺先生いる？

常川 ああ、はい。ああ、いいえ。

石原 （微笑んで）どっち。

常川 僕は朝から……（登美子に）研究室かなあ？

石原 その突き当りでしょ？

常川 ええ、はい。

石原 不在だったよ。で、ココが学生控え室だよ。

常川 ええ。

石原 そう。じゃあいいな……ああ、ココで待ち合わせ。

常川 ああ、そうですかあ。

登美子 あ、失礼ですが……

常川 ああつ！

登美子 何？

常川 も、もしかして、い、石原先生でしょうか？

石原 ああ、うん。

登美子 石原……石原純？

石原 そうそう、純。

登美子 あ、すいません。

石原 いやいや。でもよく判ったねえ。

常川 それはもう。論文はもちろん最近じゃあいろいろ……あ、

石原 なるほど。最近また煩いからなあ……月刊雑誌でしょ？ 最近流行りの、

青年向けの……

常川 ああ、いえ……

登美子 （常川に）え、何？

常川 あ、いや、その……

石原 そろそろいいかなあ……

フラスコのアルコールランプを消して、その辺にあつたコップに液体を注ぐ石原。登美子に雑誌の話題を聞かれ困っている常川。

ケンタ 何だか雲行きが怪しいぞ。

山崎先生 先の桑木或雄が「歌わぬ物理学者」だったのに対し、石原氏はもっぱら「恋する物理学者」と呼ばれている。まあ、そのお相手がアララギ派の

女性歌人だから、「歌う物理学者」でもいいんだけどね。

キョウコ （資料見て）大正10年7月30日付の新聞紙面より。世界的物理

学者・石原純。色香に迷い東北帝国大教授の椅子を辞職。アララギ流歌人・

原阿佐緒との恋愛問題、ついに最終局面に加速。

ナツエ ああ、じゃあそれで元教授だったのね。

ケンタ 昔の職場に顔が出しにくいわけだ。

キョウコ 「阿佐緒の童女的な媚態は、先端物理学者の頭脳を惑わすに十分魅力的な愛の罠であったと推測される。ちなみに石原氏は15年前に結婚、今なお妻子を持つ身である」

登美子&ナツエ え、じゃあ、いわゆる不倫じゃないですか？

山崎先生 ナツエ君。

登美子&ナツエ ああ、すいません：

石原 いえいえ。おっしゃる通りですよお嬢さん。新聞雑誌もせめてそれ位の表現で留めてくれればこっちも楽なだけどね：

登美子 はあ：

常川 …あ、そうだ宮崎さん。

登美子 何？

常川 ほらあつちにクッキーあつたじゃん？ 吉岡先輩にもらった。

登美子 あ、うん。

常川 お出ししてくれない？

登美子 ああ、そうね。

石原 ああ、いいよいよ僕は……（常川に視線向け）あ、でも、やっぱ貰おうかな、せっかくだから。

登美子 少々お待ち下さい。

あくまでクールに奥へ去る登美子。

ケンタ あ、じゃあ俺も。

山崎先生 ダメです。どうせクッキーの物色だろ？

ケンタ ガーン。

山崎先生 何だそれ？ 流行ってるの？

生徒3人 シー。

山崎先生 ……

常川 どうもすいません、根は結構いい奴なんです、なにせ世間知らずの部

石原 どつかのご令嬢？

常川 親父さんが神戸で貿易商やってるらしくて…まあ、裕福ですね。

石原 ふーん：

常川 申し遅れました。田辺研3回生の常川昭二です。で、今のが：

石原 宮崎さんね。

常川 ああ、ええ。宮崎登美子です。

石原 女性の名前は一発で覚えなないと。

常川 はあ…あれ？ でも石原先生、今回はアインシュタイン博士の専属の通訳なんですよねえ？

石原 うん。昨日も名古屋でやつつけてきたよ。寒かったなあ。

常川 名古屋の、公会堂か何処かですか？

石原 それがさあ、適当な場所が無かったのか、なぜか国技館なのよ。架設の大きな黒板こしらえて、一般聴衆は相撲の観劇よろしくむしろの上で胡坐だな。壇上には集められた火鉢がいくつも置かれ、時々係員が炭を追加するのね。そんな中、博士は外套を着たままで、右に左に熊のように歩きながら淡々と講義が進んでいく。

常川&ケンタ へえ。

石原 今日は移動日だね、僕は熱田神宮の見学まで付き合つて後は、全日程同行の稲垣夫妻や山本さんに任せて、先に来ちゃった。ちよつと息抜き。

常川 山本さんって「改造社」の山本社長ですよねえ。アインシュタイン博士を日本に呼んだ立役者のの。

石原 そう。でも、国でも大学でもなくて、いち民間の雑誌社がこのドデカイムーブメントを主催してわけでしょ？ その綻びがチラホラとね。

常川&ケンタ と、言いますと？

ナツエ 上手い上手い。

石原 （微笑んで）うん、つまりね…：僕なんか、博士に気を使ってサボタージュしてるってことさ。少しでも気苦労が減ればってね。でもお偉いさんや金勘定をする輩は、気付いてもないけどね。

常川 つまり、連日の過密スケジュールで博士は疲れ切つてると…

石原 そろそろ爆発するかもね。地方巡業も佳境を越えたし。

常川&ケンタ&ナツエ&キョウコ へえ。

山崎先生 つたくそういう事ばかり…

生徒3人 シー。

山崎先生 ……

石原 そうそう面白いエピソードがあつてね。山本社長がある夜、自信満々に博士を自宅に招いたんだな。

常川 ああ、ええ。

ナツエ ちつ、外した。

石原 彼は家人はもちろん、使用人やら女中、住まわせてる書生などを次々と紹介した。もちろん博士は分け隔てなく穏やかに応対したが、その紹介の後、チラリ表情に曇りが見えた。

常川 えつと……疲れているのに全員を紹介された不快感、ですか？

石原 いや、そうじゃない。博士は下男や女中、書生たちの態度から、まだまだこの国に残る貧しい階級制度を感じ、その身分の恩恵を当然のように紹介する山本社長に不快を感じたんだ。事実博士は、後日この事を「山本は実にご立派な男だ」と皮肉混じりに漏らしている。

4人 へえ。

石原 で？ 君としては実験を通じて彼女を何とかモノにしたい所存かな？

常川&4人 え？

石原 え、違うの？

常川 違いますよ、彼女はちゃんと学内にお気に入りがいて……

石原 ふーん。てつきり人払いかと思つたよ。僕に研究と恋愛の両立に関して尋ねたい事でもあるのかと。

常川 あ、いや……思つてない訳ではないんですが……それにしても遅いなあ……

石原&4人 ふーん。

石原 ま、でも思うにああいうタイプはさあ……

(登美子の声) いくらなんでも酷いですよ。どうして女子だけ選抜されなきやいけないんです？

(男の声) や、だから、それは総長クラスが決めたことだからさあ……

足早に登場する男(＝田辺元)とそれを追つて、クツキーの皿を持つて登場する登美子。

田辺 ああ、お待たせ。

石原 いやいや……(ニヤニヤして常川に視線) 今も彼と興味深い話題を……

常川 ……先生……

登美子 (不満げに皿を机に置き) お待たせしました。

石原 ……どうもありがとう。

田辺 え、何？ どうかした？

山崎先生 (腕時計を見て) あれ、やばいなあ……ナツエ君、明かりを。

ナツエ はいよ。

気軽に宙を指すナツエ。たまたま正面に顔を向けてる田辺に強い明かり。以下、他の人物もストップモーション。特に登美子は食べかけたクツキーを口に運んだままだったりする。

山崎先生

田辺元。本道は哲学なのだが、大学時代から桑木が翻訳したプランクやアインシュタインの論文に触れ、大学院では見事な物理論文を書き上げている。大正2年から躍進目立つ東北帝国大に講師として就任。ただ、当時は文学部が無かったため、あくまで共通学科として科学概論を教えている。

ナツエ

東北大つたら、この不倫親父と一緒にやん。

山崎先生

うん。同僚としての交流も深かったようだね。

ケンタ

旧知の仲って奴だな。

キョウコ

(資料見て) 研究者としては派手さを嫌う礼儀正しい人柄だったが、彼が担った「共通学科」という概念は、一般的な基礎概論を広く普及するという意味で重要であり、その後の大学教育の柱となっていく。

ケンタ

どういうこと？

キョウコ

つまり、物理なら物理を、専門的に学ぶ学生だけでなく、一般教養として全学部基礎概念を教えていくシステムね。彼はその基礎を地道に築いていった。これも東北大がハシリだったんだ。

ナツエ

頑張ったのね、みんなが、田舎で。

山崎先生

そして、そんな彼を助教授として推薦し、仙台から引き抜いたのが、当時一世を風靡した哲学者、「善の研究」で有名な、西田幾多郎だった。名前ぐらいは聞いたことがあるだろう？

ケンタ

あああ、キタロウねえ……(前髪を上げる)

ナツエ

違うわよ。ほら大竹まことと組んで、シティーボーイズっていう……

キョウコ

そうじゃなくて、ほらオカリナ？ あれで環境音楽って言うか……

山崎先生

違う。

3人

(笑顔で) ガーン。

山崎先生

……

**キョウコ** お前、京都から来タロウ？

**山崎先生** 意味がわからん。

**キョウコ** すいません。

**山崎先生** だが場所だけは合っている。

**3人** えっ？

**山崎先生** 西田幾多郎に招かれ、3年前、田辺氏が赴任したのが何を隠そうこの京都帝国大学だったんだ。

**ケンタ** え、ココ京都だったの？

**ナツエ** 確かに関西とか言ってたなあ。

**キョウコ** じゃああの西田幾多郎先生も、この学内の何処かにいるんですね？

**山崎先生** 多分今頃は、明日のインシュタイン一般講演の前に、記者連中に取材されてるんじゃない？

**ナツエ** 人気者なのね。

**(男の声)** あのー、すいません…

舞台上、明らかに不条理な場所に：明らかに某アニメ漫画に登場し

そうなコミカルな妖怪1が立っている。

**妖怪1** あのお、鬼太郎先生は？……

**4人** (断固として首を横に振る)

**妖怪1** ああ、そうですか……

寂しそうに花道に去る妖怪1。

**山崎先生** ……何も見てないよね？

**3人** (首を縦に振る)

**山崎先生** 話を田辺氏に戻そう。えっとどこまで行ったかな…

**キョウコ** インシュタイン博士との絡みは？

**山崎先生** ああ、そうそう。彼もまた、訪日前のベルリンの自宅に何度も訪れている。雑誌「改造社」の社員と同行して、最後の決断を迫り粘っている。

**ケンタ** 何だ、博士は結構嫌がってたの？

**山崎先生** や、問題はエルザ婦人だったんだね。当時の欧州人は誰もが博士のように東洋に魅力を感じていたわけではなかった。

**ナツエ** その日本って国は西洋の食事はありますか？

**ケンタ** おトイレは？ ほとんどドボンだって聞いてますが？

**山崎先生** まあ、そんな感じかな。とにかく全ての交渉の際、必ず顔を出し、

いろいろ細かくチェックする。何度も説明したことを、また聞き返す。ある

時、打ち合わせの帰路に婦人が夜空を眺めて改造社の社員に尋ねる「日本に

もあの月がありますか？」。社員が返答に困っていると博士が「馬鹿なことを言いなさんな。日本にはもっといい月があるよ」と優しくたしなめる。

**ナツエ** どっぷり難癖ババアだなあ。

**山崎先生** まあ、少し擁護すると…2人の幼な子が居たからね。さすがに同行

はさせないしドイツに長期間残していくのも不安だった。それにも増して

最愛の、実生活では子供同然の博士を、一人で旅立たせるのはもっと不安だった。そのジレンマだね。

**キョウコ** 何か判るような気もします。

**山崎先生** そうね。で、田辺氏たちの懸命な説得により、やっと合意の最終局面になって、またエルザ婦人がモジモジと言ってきた。するとそれまで黙っ

ていた博士が：

**田辺** (バンと机を叩き) ヤー オーダー ナイン

**全員** ……

**田辺** つまり「イエスカノーか？」…だね。空気が凍って暫しの沈黙。やがて奥さんは、僕達の方をちらりと見てから「そうしましょう」と静かに言った

んだ…

再び動きを止める田辺。

**ケンタ** ああ、びっくりした。おしっこ漏らしそうだった。

**キョウコ** 先生…ある意味、抗議も含まれているのでは…長い停止への

**山崎先生** そうだね…じゃあ、ナツエ君。

**ナツエ** はいよ。

照明機材に指示をするナツエ。明かりが戻る。合わせて終業のチャ

イム。生徒たち以外はまだ不動。

**山崎先生** 何とかギリギリ間に合ったな。では今日はココまで。すっかり介入

したお詫びも込めて、皆、迅速に掃けるように。  
ケンタ 起立。  
キョウコ 礼。  
全員 ありがとうございます。

予言通り迅速に去る4人。田辺以外の残りが動きを回復する。

常川 あれ、おつかしいなあ。

石原 え、何？ チャイム？

常川 今日、基本的に休講扱いでしょ？ 教授陣全員明日の準備で。

登美子 (クツキーをモグモグしながら) ああ、確かに朝から聞いてなかった

気がする。

常川 何モグモグしてんの？

登美子 え？……あれ？

石原 空耳だよ。

常川 えっ？ こんなに全員ですか？

石原 (ストレッチしながら) もしくは亜空間に取り込まれたかな？

常川 えっ？

登美子 あ、確かに私も何か筋肉痛が…

田辺 (パンと机を叩き) ヤー オーダー ナイン…あいてて…

3人 ……

田辺 つまり「イエスカノーか？」…だね。空気が凍って暫しの沈黙。やがて

奥さんは、僕達の方をちらりと……あれ？

常川 大丈夫ですか、先生。

田辺 いてて……今、僕喋ってた？

常川 ええ、かなり明確に。

石原 博士の話だよねえ、前に聞いた、訪日決意の…

田辺 ああ、ええ、そうなんですが……あれ？

常川 (微笑んで) これも相対性のなせる技ですか？

全員 ははは。

田辺 じゃあ、まあ、どうします？ 飯でも食いますか？

石原 や、僕はどちらでもいいけど……君たちも明日は来るんだろ？ えっと

京都市公会堂？

常川 ええ、何とか…ちよつと小遣いが不安ではあるんですが…

石原 まあ、そう言わずに。聞こうと思っても聞けない講義だよ。それに東京、

仙台より1円もさつ引いてるんだから。

常川 ああ、はい。

田辺 え、そうなんだ。

石原 うん。仙台が思いのほか入らなかつたからね。皮算用が狂い慌てた実業

家・改造社社長山本氏のテコ入れ策。学生と小学生教諭にかぎり3円の入場

料を2円に引き下げ。

田辺 へえ。ま、貧乏学生には十分な高値だけだね。

登美子 あ。

石原 うん？

登美子 私は残念ながら欠席です。ああ、お金の話ではなくて…

石原 ああ、そう。

登美子 ちよつとお稽古事があるので。

石原 そう、それは残念だ。

登美子 来週の学生歓迎会にはぜひ。

石原 ああ、入場無料の……ああ、失礼。そういう話ではなくてね。

登美子 はい。

常川 ……じゃあ、僕たちはぼちぼち。

石原 うん。またゆつくりね。学生歓迎会の方は、もしかしたら東京の寺田さ

んも覗くかも知れないって言ってたし。

田辺 へえ、そうですか。

登美子 寺田寅彦先生でしょうか？

石原 ああ、うん。

登美子 あの東京帝国大学教授にして高名なエッセイスト、一線の哲学者にし

て実験物理学者、何より夏目漱石先生の一番弟子で…

常川 あの、宮崎さん…

登美子 どうしましょう私、…私、ちよつと失礼します。

他者にはよく判らない極めて個人的な興奮状態で、そのまま奥へ去  
つてしまふ登美子。

常川 宮崎さん？…

田辺 …あれ？ 僕確か、彼女に何か怒られてなかったっけ？

常川 あ、じゃあ僕も、失礼します。

石原 苦勞するね。

常川 えっ？ や、先生…

石原 ま、頑張つて。ああ、えっと…

常川 …常川です…

石原 ああ、そうそう。常川君。

常川 では…

やや力なく奥へ去る常川。

石原 もう一杯もらつちやおつと。

田辺 ああ、すまなかつたですわねえ、わざわざ出向いてもらつて。

石原 いやいや。早めに来てブラブラしてた。懐かしさも手伝つてね。

田辺 ああ、そうかあ。

石原 それにしても久しぶりだねえ。2年ぶり？

田辺 ええ、確か集中講義で来ていただいて…や、實際驚きましたよ。辞職の報道を聞いた時は。

石原 それすら懐かしく感じるよ…ほら、一応僕も勅任官だったわけじゃない？ まがいなりにも帝国大学の教授だったわけだからさあ。

田辺 ああ、ええ。

石原 つまり職を辞すにはそれだけの正式な手続きがいるわけね。勅許つて言うんだけど。さすがに「女のために辞めます」じゃ通らないわけ。

田辺 なるほど。

石原 でね、かの齊藤茂吉大先生に頭を下げて、診断書書いてもらつて、休職願いと共に出したわけ。

田辺 ああそうか、短歌の…アララギ派のつながりですね。

石原 うん。歌会の大先輩が現役の医師で助かったよ。一応「神経的な病」つて事になつてる。

田辺 なるほど…。

器の液体をゆつくり口に運ぶ石原。

田辺 後悔はしてないんですか？ 少しも。

石原 君、知つてたつ阿佐緒は。

田辺 や、雑誌の写真でしか。

石原 そう。…誰もが信じられないつて言うよ。そりやそうだろう。僕自身が信じれないから。やっぱ茂吉先生の診断どおり、僕は狂つてるんだな。

田辺 石原さん…

石原 今こうして君と話してる僕。そして連日世界的な天才学者の前で真摯な通訳をしている僕。とても同じ男とは思えない。家庭を捨て、一人のなかなか最後まで落ちない女の前で、おろおろしている自分がね。

田辺 …そういうモンですかねえ…

石原 アインシュタイン先生にも言われたよ。神戸の港で真つ先にね。「君は今、気ままに生きてるそうじゃないか。でも学者は生活が乱れては良くない。生活こそが大切だよ」つて。…大したもんだろ、俺も。300年に一人つて天才学者の胸を痛めさせてるんだぜ。

田辺 西田さんも気にしてましたよ。桑木さんも。

石原 遠慮はいいよ。「石原はどんどん悪くなつていく」つて感じだろ？

田辺 石原さん…

石原 本だから。随ちていつてる自覚はある。でも不思議と未練はないんだね。なんだ？ 理性より先に何処か腹を括つてしまった感じつていうか…あれだな。急激に飲み込まれる一瞬の流れに任せてる快感つて言うかさ。

田辺 ブラックホールみたく、ですか？ 最近、流行の。

石原 あ、そんな感じ。自分の地位も学問への意欲も全てが等価値になつて、どうでもよくなつて…とはいえ同時に、微動すら出来ない自分を観察しているもう一人の自分も居る。

田辺 哲学比喩を嫌つたプランク派の立場では、とても領けない論旨ですなあ。

石原 阿佐緒の前に僕が存在した瞬間に、切り替わつちゃうんだよ。全てのスイツチが。音を立てて、一瞬にね。カチカチカチつてね。

田辺 へえ。

石原 ま、でも、今回のことは心底幸運に思つてるんだけどね。

田辺 はあ…

残つた液体をぐつと飲み干す石原。

田辺 どうですか？ 博士の様子は？

石原 うん。圧倒的だね何もかもが。自分がとっても小さく見える。

田辺 基本的に物静かなんでしょ？

石原 そう。穏やかな風体の下に、飽くなき好奇心と観察眼、そして揺るがぬ信念が潜んでる。

田辺 ああ、何かわかる気がするなあ。

石原 先月の来日直後、神戸港でお出迎えの和服の女性たちを見てエルザ婦人がさ「おお日本の女ですね」と喜んでいたら博士が早速「いや、あれはまだ純粹な日本風ではないだろう」って水をさしてた。

田辺 つまり……すでに欧米化の影を見抜いてた、って感じですか。

石原 そう。ま、神戸だしね。

田辺 へえ。上陸の後、まずはココ京都の都ホテルだったんですね、宿泊。

初日から皆で議論したって。

石原 ああ、うん。長岡大先生と僕、そう桑木さんもいたなあ。晚餐後、博士から問題提起されてね、11時過ぎまで議論白熱。

田辺 へえ。

石原 で、翌日はケロリとして、駅に急ぐタクシートの運転手に向かって「もつとゆっくり」を連呼して、建物や市井の様子に見入ってた。

田辺 そうか、その足で東京入りですね。大変だなあ。

石原 列車の中でも博士は外の風景を丹念に筆記してた。でも、夕刻の富士山が見られたのは良かったね。時間が止まった感じがしたよ。同行の僕らも黙って博士夫妻の感慨に付き合った……でもすぐに新聞記者連中が途中の駅から箱乗りしてきて、博士は質問攻めに身を投じたわけだ。

田辺 石原さんも大変だ。通訳兼身辺警護か。

石原 東京駅もすごかったよ。特急列車の到着を待ってた数百人が改札の内外に犇きあっていた。取材写真班の放つ無数のマグネシウムの閃光と「アインシュタイン」「万歳」の連呼による大騒音の中、警官隊の手を借りてやっと改札を抜けて、一旦ステーションホテルの一室に退避した時、博士のネクタイと夫人の洋服は右に左に捻れまくってた。

田辺 何か気の毒ですね。勝手にエスカレーターしたお祭り騒ぎに担ぎ上げられて……ブームに弱い国民性というか……

石原 国民の歓迎振り自体には喜んでたよ。こんな事は人生の中で初めてだったね。でも舞い上がったらしいのが博士らしい。出来ないサービスはちゃ

んと丁寧に断るし……そうそう、ホテルの食事が豪勢過ぎて食べきれないから、メインディッシュを半分にするようボーイに言ったり、実際一品を厨房に返したりしている。

田辺 「過剰な財産は重荷となって、学問に身が入らぬ」ですな。

石原 多分、煌びやかな帝国ホテルより、ココの都ホテルの方が数段お気に入りのはずだ。

田辺 まあ、わが国の趣向を上手く取り入れてますしね。……僕もちよつともらおう。

窓際で飲み物をコップに入れる田辺。この辺りでケンタ入室。

田辺 つまみませんか？

石原 ああ、ありがとう。

クッキーをつまむ石原。便乗するケンタ。田辺もつまむ。

田辺 でも、何だか聞いてるだけでヘトヘトだなあ。

石原 脳みその許容量が違うんだな、多分。後は……子供好きと学生好き。これは相変わらずだね。尊敬に値するよ。東京で農家を見学したんだけどさあ。

田辺 え、そんなことまでしてるんですか？ 多忙な講義の合間に？

石原 うん。歓迎会やパーティーよりよほど積極的だね。

田辺&ケンタ へえ。

石原 目黒の農家でね。異人さん見たさの鼻たれ小僧の頭を一人ずつ撫で回し、デキモノだらけのじやりっ禿げの子を撫でながら、これは可哀想だ。と言って菓を与える指示までしていた。

田辺&ケンタ へえ。

石原 農家の薄汚い縁側に並んで腰を下ろし、どぎつい色の棒飴と一緒に頬張って、駄菓子にデザインされてたお多福の真似をして、子供たちをキャッキヤ言わせてるのね。

田辺 何だかガキ共がうらやましいなあ。

石原 仙台講演の後も観光の時間があつたらしくてね。凧揚げする子供の糸を丁寧に直してやつたらしい。日光では出迎えの小学生がいて、教師が直立不動で長々挨拶する間中、一人の女生徒に自分の帽子をかぶせて、遊んでいた

って話だ。

田辺 一人でも後の学者が育つと良いですなあ。そんな貴重な経験した子供の  
中から、

石原 そうだね。そう言う意味では、博士は学生たちにも労を惜しまず接して  
いる。知名度狙いやコネを使ったお誘いは結構辞退してるけど、学生主催の  
歓迎会はすべて出席してるからね。多分、あれだろ。博士は雑欲がなかった  
り、賢ぶらない振る舞いが好きなんだな。

田辺 ああ、それもわかる気がする。……あ、そういえば、うちの学生が行っ  
てたはずですね。東大の特別講義。

石原 え、わざわざココから？ 何て子？

田辺 荒木俊馬という3回生ですが。

石原 京大の荒木……ああ、いたいた荒木君ね。交流会でも少し話したよ。な  
んだ君の生徒だったのか。

田辺 ええ。実は今度の学生歓迎会で祝辞を読ませる予定で……

石原 えっと、明日の晩だっけ？

田辺 や、明日は公会堂での一般講演だけね。んで、先に大阪、神戸と講演が  
あつて、歓迎会は5日後の……14日かな。

石原 ああ、そうそう。んでその次の日がココの視察だ。

田辺 え？ 博士が、ですか？ 聞いてないなあ。

石原 あれ？ お忍びだったかな？ ま、いいや。

もう一つクッキーをつまむ石原。机に伏せて眠っているケンタ。

田辺 やっぱ行きませんか？ 飯でも。

石原 そうだねえ……西田さんは捕まらないかなあ。

田辺 ああ、どうでしょうねえ……

石原 ここ来る前ちらり覗いたら記者団に囲まれ大変そうだった。よっぽど助  
け舟出そうかと思っただけど、今度は僕が追いかけるの目に見えてたから

田辺 ね。もちろんゴシップネタだけ。

石原 なるほど……流石に退散したかな記者陣は。

田辺 ちよっと先にお詫びをしたくてね。

石原 お詫びですか？

田辺 うん。人づてなんだけど、どうやら僕が通訳する件で、西田さんが学会

の大家に怒られたらしい。なんで石原なんか推薦するって。

田辺 ああ、桑木さんからの情報ですね。

石原 あ、なんだ聞いてた？

田辺 あれは気にしなくていいですよ。お偉いさんのやつかみですし。

石原 うん。まあ、そうなんだっけね。阿佐緒の事を伏せてた時期だし……

田辺 ああ……思えば僕に石原さんを紹介してくれたのも西田先生でした。

石原 そうだよなあ。もつと言え、誰か大物を日本に呼びたがってた改造社  
の山本氏にアインシュタインの名前を出したのも西田さんだ。

田辺 ええ……あ、じゃあちようどいいや。石原さんからも説得して下さいよ。

石原 え、何？ 西田さん？

田辺 明日の一般講義、どうしても行かないって言って。

石原 うそ。それは勿体無い。

田辺 や、記者連中もぜひ「世紀のご対面」を記事にしたいって、それもあつて  
毎日押しかけているんですがね。

石原 なるほどね。

田辺 「わざわざ講義を聞いたって仕方ない。著書さえ読めば十分だ」って。

石原 はは、西田さんらしい。それってあれでしょ？ 対博士へではなくて、  
改造社への苦言でしょ？

田辺 ええ。一般聴衆に判りつこない演目を、しかも各地で同じ内容で話させ  
ている。その気配りの無さへの抗議ですね。でも、我々としては、西田さん

には少なくとも5日後の歓迎会には、その前の昼食会から参加してもらわな  
くてはいけないわけで、出来れば明日もって……

石原 ま、そうだろうなあ……

田辺 じゃあ、ま、覗いてみましようか。

石原 うん。行ってみよう。

田辺 適当に飲み物の器などを片す田辺。クッキーの器なども持つ。

石原 なんだか学生も浮ついてますよ。

田辺 ま、そうだろう。

石原 っていうか、何かコンソソしてるんだよなあ、あいつら……

田辺 (去りながら) あ、そうそう、さっきの寺田氏が来る話だけどさあ……

石原 (去りながら) ああ、はいはい……

田辺 (去りながら) ああ、はいはい……

奥へ去る石原、田辺。ゆっくり明かりが変化。

## 【SCENE/2】

眠っているケンタ。やがて通路から雪だるまの着ぐるみが登場。手には風呂敷包み。コソコソしながら椅子に着席。ケンタ目覚めるが、着ぐるみはケンタに気付かない。雪だるま、おもむろに頭の部分を脱ぐ。何とそれはアインシュタイン博士……。手に持っていた風呂敷を解き、中からざる蕎麦の器を取り出すES。ぎこちない箸使いのES。何とか汁まで運び一すすり。その音に合わせて照明変化。ケンタ、壁際の日めくりに向かう。もう一すすりするES。「9」から「10」へ一枚破るケンタ。その音に初めてケンタを確認するES。暫しの間。

ES ……

ケンタ ……(もう一口食べるよう促す)

ES ……(ズルズルズルズル)

ケンタ (「10」から「11」へ)

ES (現象を理解し「待て」のマイム、蕎麦を補充しズルズルズルズル)

ケンタ (「11」から「12」へ)

ES (ズルズルズルズル)

ケンタ (「12」から「13」へ)

ES (暫し咳き込み、再び補充しズルズルズルズル)

ケンタ (「13」から「14」へ)

明かり一段と変わる。空間の変化に不思議そうなES。日めくりから離れ奥に向かうケンタ。

ES (独語で) ちょっと待って下さい、不思議な少年。

ケンタ ……(足を止める) ……

ES (独語で) 君は確かどこかで…

足早に奥へ去るケンタ。少し迷いながらも席に戻るES。慎重にもう一口蕎麦をすすするES。照明今度は夜になり、ヒトの気配。

(男の声) だからあ、ボーアの考え方だと、それすら確定できなくなるんだよ。理由は明らかではないけど、そうなっている。

(常川の声) つまり統計が先にありきって事だろ？ それはいくら何でも都合が良すぎるでしょ？

入室する常川と若い男(≡荒木俊馬)。常川は一升瓶みを持つている。警戒しながらも、好奇心に勝てず、その場に居続けるES。

荒木 まあ、その辺を受け入れられるか否かだろうね…あ、それとね。さっきの電磁場エネルギーのテンソル対象性んだけどさあ、例えば…

黒板に数式を書いていく荒木。一升瓶の蓋を取り湯飲みを用意する常川。数式に惹かれて黒板に近づくと着ぐるみのES。

常川 呑む？

荒木 ああ、少しなら…よしと。ほらエネルギーを仮にこうするとね、偏微分方程式でなんとか進めそうな感じがしない？

常川 (一応眺めて) もういいよ、今夜はこれ以上数式は入らない。

荒木 うーん。ま、そうだな。明日にしよう。

常川 じゃあ、ま、改めて。

荒木 うん。乾杯。

コップを合わせる2人。数式の間違いを一部訂正し、それを眺めつつ、蕎麦を床に置いて寝そべるES。そのまま床に数式を書く。

常川 お疲れ様でした。ああ、そう歓迎会の祝辞も。

荒木 いやあ、さすがに足が震えたよ。ドイツ語の字引き片手に原稿作りに丸

3日間。

常川 それで籠ったのね。下宿に。

荒木 うん。それで暗記に丸2日間。

常川 博士が褒めてたんだろ？ 「非の打ち所が無い」発言だって。

荒木 うん、聞いた。石原さんから。

常川 やっぱ敵わないなあ、お前には…

荒木 お前だつてこの前、石原先生と会つたんだろ、ここで。その時間けば良

常川 かつたじゃん、ボーアの理論とか。

荒木 ああ…あの時は、他にいろいろ問題があつてね。

常川 え、何だよ、問題つて。

荒木 や、大したことじゃないし。

常川 あ、判つた。女性問題だな？（%）原阿佐緒だつて？

荒木 （%と同時に）まさか、違うよ…あ、

常川 えっ？

常川 ……

この間で見事に蕎麦をすすするES。

荒木 何だお前の話？

常川 だから違うつて。

荒木 え、誰だよ？ 俺の知つてる子？ 任せとけつて。何としても俺が取り

持つてやるから。さあ、言えよ。

常川 そればかりは出来ない。

荒木 え、何でだよ。あ、もしかして道に外れた恋路か？

常川 そんなじゃないけど…もういいから、本当に。あんなに恋多き奴と

荒木 は思わなかつた…

常川 何だよ水臭いなあ……そういえば宮崎さんは？

荒木 ……ああ、帰つたんじゃないか？ さすがに門限過ぎてたし…

荒木 ああ、そうか。全くご令嬢さんには敵わないな。お前、間違つてもあんなにだけは惚れるなよ。

常川 つたく鋭いんだか鈍いのか。

荒木 え、何？

常川 別に。

荒木 何だよ、お前今夜は変だよ、ホント。

常川 いいから放つておいてくれよ…

コップを傾ける常川。器のつゆを飲み干して立ち上がり、もう一度  
数式を眺めて去るES。

荒木 まあまあ…ほら（酒を注ぎ足す）…

常川 ああ……うん…

荒木 でも、今夜の博士のスピーチは面白かつたよね。

常川 ああ、うん。何かコラム的つて言うか…5日前の公会堂よりずっと人柄

に触れた気がしたな。

演目が「いかにして私は相対性理論に近づいたか」。きつとどこの論文雑誌に

も載つてないぜ。

常川 東京はどうだつたの？ 交流会も顔出したんでしょ？

荒木 ああ、でも東大の連続講義は全て相対性理論そのものの講義だからね。

5日前の一般講義と内容は同じだよ。交流会ももつとお堅い理論めいた話ばかり

だつた。多分、今夜のは格別なんじゃないかな。

常川 へえ。人も多かつたけど。1200人ぐらい？

荒木 や、1500だつて。公会堂が1000人だからタダの方が5割増。

常川 俺も今夜だけにしとけば良かったかな。

荒木 んで？ 計画はどうすんの？ 今夜のミニ講義で満足した？

常川 や、いっそう意欲がわいた。

荒木 そう来なくちゃ。お偉い先生方だけに博士を独占させておく手はない。

歴史的なチャンスだからね。

常川 （紙切れを出し）やつと入手したよ、詳しいスケジュール。

荒木 お、宮崎さん？

常川 うん。親父さんのコネクションらしいけど…あ、それとね、やつぱ噂通

り、京都入してから随分スケジュールが緩くなつてゐるらしい。いろいろキヤ

ンセルしてゐるつて。

荒木 なおさら好都合ですなあ。どれどれ……ま、今夜はいいとして…明日1

5日が午前中に京都の観光、知恩院ね……午後にはココの視察と。きつとココ

はまた学長だ何だつて寄り付けないだろうな…

常川 翌16日が市内および近郊の視察、観光としか書いてない。

荒木 で、次の日が昼近くに奈良ホテルか…

常川 でね、その後は6日後の福岡での最終講義まで結構自由な日程なんだけ

ど、どうやら奈良から大阪経由で山陽周りなのね。

荒木 つまり京都へは戻らない。

常川 都ホテル泊は明後日が最終日と踏んだほうが良さそうだ。

荒木 なるほど…じゃあ明後日、16日の夜で決まりだね。もしかしたら博士と京都で会える生涯最後の一日だ。

常川 場所はココで良いんだよね？

荒木 うん。ホテルの裏手で出迎えて、同行してもらおう。「京大もと暗し」。博士も前日に来てるなら安心だろうし。

常川 うん。でも大丈夫かなあ…

荒木 大丈夫だよ、ヒトの話や風貌から総合して、博士は学生の気持ちを汲んでくれる気がする。

常川 博士は良くてもさ…：：：ばれたら最悪で退学？

荒木 教授だって庇ってくれるさ。特に田辺さん辺りは。だって博士を独占してるのはもつと上の連中なんだから。

常川 まあ、そうかな。

荒木 じゃあ、後は…：：：博士への懇願の文章は僕が今夜やつつけるとして…：：：うやうやして手渡すかだな、せめて明日中に…：：：それと誰が手渡すか…

常川 何でこつちに来るんだよ。

荒木 や、だってさあ常川君…

(男の声) お邪魔するよ。

声と同時に通路から登場する男(寺田寅彦)。姿を認め、反射的に立ち上がる2人。

荒木 ああ、寺田先生。

常川 先ほどはどうも。

寺田 あ、何かお邪魔だった？

荒木 ああ、いえいえ…：：：終わっただけですか？ 晩餐会。

寺田 や、お偉方はまだ残ってたけど、博士もホテルに戻られたし…：：：ああ、そうそう君たちさあ、僕、一応、お忍びで来てるから、よろしくね。

荒木 はあ…

常川 でもお忍びって言われても…

寺田 ああ、うん。まあ、ある種の覚悟はしてるんだけど、東京には内緒で来

てるのね。また怒られるから、長岡さんとかに。

荒木 ああ、物理学会のドンですね。

常川 ちよつと、荒木…

寺田 大丈夫大丈夫。変に長岡先生って言うより「ドン」の方が通用するし。

常川 はあ…

荒木 あ、そうか。今日こちらなんですよね、長岡先生。確か博士のホテル。寺田 お、詳しいねえ。

常川 え、そうだったか？(無意識に先のメモを取り出す)…：：：ああ、ホントだ…：：：あ…

荒木 …：：：ああ、そうそう、それにも書いてあるだろ？

常川 えっ？…：：：あああ…：：：

荒木 (ケロッと)メンバーには事前に配つてあるんですよ、大まかな博士の日程。学生主導の催しでご迷惑が掛からないように。

寺田 へえ。それは用意周到だ。

常川 あああ、(いささか大げさに)そうなんです。

荒木 じゃあつまり、寺田先生は「ココに避難してらっしゃる」と。

寺田 フフ、なかなか言うねえ荒木君も。さてはその生意気さが売り物だな。

荒木 東京のときは成りを潜めていたけど。

寺田 恐縮です。

寺田 フフ、や、今日の長岡さんはいつ現れるか予測不能だったんだよ。結局学生歓迎会にも間に合わず直接ホテル入りだったらしいけど。半日間ビクビクしてて損をした。

常川 そんなに怖いヒトですか？ 長岡先生は。

寺田 怖いよお。根が悪いヒトではないんだが、あれは雷親父だね。特にマスコミ嫌いは徹底してる。僕なんか格好の標的だよ。「学者を殺すのはジャーナリズムだ。石原にしても寺田にしてもジャーナリズムの先棒を担いでる」

つてね。

常川 確か今回主催の改造社にも、風当たり強かったとか。

寺田 そうそう。首を縦に振らせるまでに、山本社長もあの手この手だね。や

つと同意した後も、博士を少しでも雑誌宣伝に使ったら承知しないぞ、とク

ギを刺してた。

常川 へえ。

寺田 それでも最初はあくまで民間主導なんだから、帝大内の施設は使わせ

ない、なんて言ってた。そこで僕の登場だ。雷を覚悟で「卑しくも世紀の大

天才を迎えて、そんなケチな考え方は日本学会の恥ですよ」つてね。

常川 わお、凄い。

寺田 ま、もう少し軟らかくだけどね。

荒木 落ちましたか？ 雷は。

常川 「お前は改造社宣伝の片棒を担ぐ気か」って？

寺田 うん。覚悟してたけど、意外と落ちなかった。ま、ある種素早く計算したんだろ。自分の名誉も含めてね。腹さえ決まればカラツとしてるからね。その後飲みに行ったよ。

常川 へえ。

荒木 あれ？ でも今日のホテル訪問は何なんです？ 長岡先生。

寺田 ああ、それはね、博士に特別講義の御礼として、東京帝大からのプレゼントを持って来たのね。実は僕が選定を任されて、1週間ぐらい前に京橋の版画店を選んだ物なだけどね。藤懸静也の版画集と他に50枚ほど。

常川 それは凄い量ですね。

荒木 それを長岡先生が贈呈する儀式なんだ。

寺田 うん。だからほら余計にまずいでしょ。僕がココにいます。

常川 確かに。

寺田 まあ、座れよ。

荒木 ああ、はい。

常川 失礼します。

寺田 元々は、東大で無償で集中講義してもらったお礼に、改造社へ博士招聘の費用の一部に3000円出そうって話が出てね。

荒木 それもドンですね？

寺田 そうそう。ところがこれを改造社・山本社長は辞退してきた。

常川 わ、太っ腹。

寺田 や、社長としては決して欲しくなかった訳じゃないと思うんだが、多分、

今後の駆け引きも考えてのことだろう。

荒木 つまり：貸しを作っておく、みたいな。

寺田 その通り。あ、僕なんか喋りすぎてるねえ、少し酔ったかな？

荒木 ああ、これは気が付きませんで。

一升瓶を持ち上げる荒木。素早く湯飲みを用意する常川。

寺田 や、そうじゃなくて……全く敵わんな、君たちには。

常川 どうぞ。僕たちも光栄です。

酒を注いだ湯飲みを差し出す常川。受け取る寺田。

寺田 (少し飲んで) ああ、そうそう。どうだった？ 今日の博士の講義。

常川 ええ、とても親しみがあって、感激しました。

荒木 今も「一般講義より良かった」って陰口してたところですよ。

寺田 や、僕も正直そう思うよ。でも、実はあれねえ、西田幾多郎先生の入札知恵なんだって。

常川 え、そうなんですか？

寺田 博士と一緒に昼食会を終えて、いよいよ学生歓迎会の会場へ歩いていた時に、提案したらしい。

常川 えっと、演目への注文ですか？ 西田先生が？

寺田 うん。ギリギリのタイムミングだよ。

荒木 で、アインシュタイン博士は？

寺田 「それはそう簡単なことではない。だが私にそれを望むのならそうしましょう。何を話すも同じですから」って。

2人 へえ。

寺田 むろん博士側からは西田氏への好意と、多少同じ話をする事への抵抗感もあつただろう。そして何より、博士は好きそうだから、そういう悪戯めいたゲームっぽい事がさ。

荒木 なるほど。西田先生も多少狙ってますね。試してるって言うか。

寺田 多分。

常川 へえ。ま、もう少し。

酒を促す常川。受ける寺田。

寺田 あ、そうそう忘れてた、えっと、君たちの同僚の、えっと、宮崎さん。

常川 ああ、はい。

寺田 実は彼女にせがまれて駅まで送ったんだけどさあ……

荒木 あ、そうだったんですか……

常川 ……

寺田 直接帰るからよろしく言っておいてくれて。明日はお稽古事があるから午後まで来れないって。

常川 そうですか……  
荒木 すいませんそんな伝言まで。どうも少しずれてる所あって……

寺田 なかなか積極的な娘さんじゃない。いやあ、男女同権、良いことだ。  
荒木 はあ……

常川 あ、じゃあ僕そろそろ……  
荒木 え、そうなのか？ でも明日の件……

常川 ああ……朝一番に行くよ、下宿。  
荒木 や、でも……

常川 (あえて寺田に) すいません、ちよつと野暮用を思い出しちゃって。  
寺田 ああ、うん。またいずれ、えつと……

常川 ……常川です……  
寺田 ああ、そうそう常川君。ごめんね。もう忘れないから。  
常川 いえ、では……

自分の器を持って、奥へ去る常川。

寺田 ……何か悪い事言ったかな？ 僕。

荒木 ああ、いえ……すいません無礼な輩が多くて。  
寺田 友を呼ぶんじゃない？ 類は。

荒木 ああ、そうですね。  
寺田 そうそう、見事なスピーチだったね。良かったよ。  
荒木 ありがとうございます。

寺田 実際羨ましいよ。君たちにはまだまだ無限の道が開けてる。  
荒木 はあ……寺田先生はどう思われますか？ 今回の博士来日に対しての、  
学界の受け止め方なんかは。

寺田 それはあれかな？ 例えば、ほとんど大家の先生達が交流を独占してる  
事実なんかに対して？  
荒木 ええ、それにせつかく博士から生の講義を聴く機会なのに、全国で同じ  
演目がなされてる事とか。

寺田 論文読めば同じじゃないかって？  
荒木 や、そこまでは……確かに僕も実際に聞いてみて、何でしょう……今まで

読んでいただけでは腑に落ちなかった部分が、自然と頭に入ってくるような、  
不思議な感覚はあったんですけど……

寺田 フフ、君はなかなか素直な青年だなあ。でもそれは君が物理や相対性理  
論にある程度精通してるから感じたことで、極めて一部の聴衆に起きた現象  
だろ？

荒木 ああ、確かに。先日の京都公会堂も、早々に諦め居眠りする輩や、おも  
むろに雑誌を広げだす人達も多かったですからね。大天才を前に何だよって、  
憤慨を通りこして少し悲しくなりました。

寺田 どこだって同じだよ。神田じゃあ有名な人の顔見たさにあふれ返り、入場  
を断った民衆が600人。入場券を払い戻したんだが、それでも一目顔を見  
せると女子学生や軍の将校達が会場の外で騒いでいたらしい。

荒木 へえ。でも、中に入れたヒトの中で、いったい何人が講義を理解でき  
たでしょうね。

寺田 それでも博士はお構いなしで穏やかに講義を続けていく。お得意のこん  
な草や宙を漂わせる視線をしながら、まるで静かに歌うように。石原さん  
の通訳の間はちよこんと脇の椅子に腰掛けて。窓の外の冬の景色を眺めたり、  
目の合った観客におどけてウインクしたりしながらね。

荒木 ええ、そうでした。博士はまるで大きな宇宙の中を漂ってるように右に  
左に歩きながら……

寺田 面白いのはそこさ。全然話が判らなかつた人たちでも、そんな博士の振  
る舞いに十分満足し、中には涙流すほど感激してる市民もいる。金を返せと  
文句言う奴は一人も居ない。

荒木 つまり博士の人がらですか。  
寺田 それまでの学者像っていうか、気難しさが売り物だったり険しい顔がお  
似合いのお堅いイメージとは真逆だからね。不思議な懐かしさ、ヒトを分け  
隔てしない懐の広さを多くの人が体感してる。

荒木 お祭り騒ぎに見合うだけの人物像かあ……  
寺田 逆に意地悪く言えば、企画のずさんさがかるうじて博士の人となりで助  
けられている。これに誤魔化されてはいけない。

荒木 と言いますと？  
寺田 もう一杯もらうよ。

荒木 ああ、どうぞ。

寺田 民間の雑誌社・改造社の発想はこうだ。「講演場所が違うから同じ演目  
で良いだろう」「所詮論理自体が難しいからそれを丸ごと経験してもらおう」  
ってね。素人としては悪くない、言い訳が成り立っているからね。でも、学

界御大の長岡教授まで賛同し容認するのは別問題だ。だって、事実、東大の連続講義だって、西田さん指摘の通り論文ままだし、博士は一年以上前にプリンストン大学で全く同じ講義をしている。議事録も出版されている。長岡さんも目を通してるはずだ。

荒木 へえ。

寺田 君がさつき言った通り、せっかくの機会だ。本気でわが国の科学的人材育成を目指すなら、いろんな発想が出来たはずだ。もっと自由な観点で物理の諸問題を問いかける演目とか、学生に質疑応答させる時間配分とかさ。

荒木 アレですかね。博士相手に質疑応答するだけの識見と実力が、まだこの国には根付いてないって思ってるんですかね？ 長岡先生は。

寺田 それにしたって今の自分の地位とか、無難に終わらせる功績も含め、あくまで保身的な発想だろ？ よく言ってる儒教的な師匠と弟子の関係。まだまだ学者の多くが、学問知識を出世街道の道具程度に考えてるって事だよ。

荒木 手厳しいですね。

寺田 フン。ま、その辺は酒のせいにしてさ。ほら、こう考えると、さつきの西田提案に対するインシュタイン博士の答え「何を話すも同じですから」に隠された、深い意味が見えてくる。

荒木 ああ、なるほど。西田先生もそれを踏まえて提案した：

寺田 スピーチ直前の短い会話で2人はそこまで意見交換したんだな。

荒木 やっぱ違いますね、所詮頭の構造が。

寺田 や、君もたいしたもんだよ。いわゆる聞き上手、いや、飲ませ上手か。

荒木 恐縮です。

田辺 ああ、ココでしたか。あ、派手にやつてるなあ。

通路側から田辺が登場。

荒木 どうも。

寺田 すいませんね先生。(酒を掲げ)何だか上手く片棒担がされた。

荒木 貴重なお話を聞かせていただきました。

田辺 ふーん、ま、いいけどさ。掃除とかすんだ？ 実験室。

荒木 ええ、はい。わざとらしくない程度には。

田辺 ったく口ばっかり達人なんだから。

寺田 まあ、どうですか？ 田辺さんも。

田辺 や、そうもしてられなくて……あ、でもやつばらおうかな。  
荒木 (素早く湯飲みを差し出し) どうぞ。  
田辺 うん。あ、すいませんねえ。

寺田から酒を注がれる田辺。ぐいっと半分ほど飲む。

寺田 何？ 一段落じゃないの？

田辺 それがそうも行かなくて……そうだ寺田さんっていつまでいます？

寺田 ああ、そうだなあ……今夜はとりあえず宿は押さえてあるけど……

田辺 それがね、博士の在京日程が少し前に変更になって、明日ココの理学部を視察に来るんですよ。

寺田 ああ、それで急ぎの掃除ね。

田辺 付き合ってもらえませんか？ 明日。飯ぐらい奢りますから。

寺田 うーん、どうしようかなあ……

荒木 何せお忍びですもんね。

田辺 ン？ 何だそれ？

寺田 ああ、いえいえ。それより博士の日程変更ってのは……

田辺 ええ……(荒木に)人に言うなよ。

荒木 もちろん。

田辺 (寺田に)それがね。3日前、つまり大阪講演から戻った夜に事件が勃

発しましてね。

寺田 事件、かい？

田辺 博士が急に、もう京都から動きたくないって。

寺田 えっ？ どう言う事？ だってまだ一般講演自体が神戸と福岡で……

田辺 そうなんですよ。でも聞いてみると単なる博士のわがままだけでもなく

ってですわね……

寺田 じゃあやつばエルザ婦人？

田辺 や、そうじゃなくて、あ、いや、そうなんです……

寺田 (笑って)どっち？

田辺 つまりエルザ婦人は言いだしっぺで……

寺田 え、何々？

田辺 ……ああ、もう、質問は後。僕、長く話しますから。

寺田 ああ、どうぞ……

田辺 つまりですね……あれ、何だっけ……

荒木 プツ。

田辺 (荒木を睨む) ああ、そうそう、つまりね、最初に契約書つてのがあるわけですよ。結構細かい。来日の前に交わした。

寺田 ああ、改造社と博士の間のね。ああ、すまん……

田辺 そうそう。訪日の日程とか、謝礼金の額とか、渡航費用とかの細かい奴がね。で、そこには特別講義が6日間。地方を回る一般公演が6箇所と明記されて……

荒木 でも東京で2回、仙台、名古屋、京都ですよ、んで4日前の大阪だから、あ、すいません……

田辺 そう。まさにそう。既に約束の6回は満たして……って主張なのよ、博士の。ああ、言いだしつぺはエルザ婦人ね。……えっと……それで……あのさ。

寺田 うん。

田辺 やっぱ適当に質問してくれない？ その方がいいみたい、俺。

寺田 あ、じゃあ……

荒木 でも既に入場券売ってるんでしょ？ 神戸も福岡も。

田辺 そう。大慌てした改造社・山本がその辺を理由に説得してさ。

荒木 でも博士だって予定は知ってたはずですよ、ねえ。

田辺 そう。そこでエルザ婦人が絡んでくる。まず爆発したのは彼女だった。

荒木 そうか、婦人思いの博士は自分の意見として山本氏に告げる。

田辺 そう。博士はいわゆる板ばさみの状態だったんだ。

荒木 つまり、博士もさすがに中止にはできない覚悟をしてたんですね。

田辺 そう。婦人を立てて抗議をし、山本にも同時に釘を刺す。

荒木 なるほど、なるほど。

寺田 ……何か師弟愛を感じるなあ

2人 (ニコニコしながら) えっ？ 何です？

寺田 あ、いや……続けて。

田辺 えっと、何だっけ？

荒木 つまり、それでココ数日間を含め京都以降のスケジュールが緩くなってるんですね。

田辺 そうそう。博士は山本の説得を受けて、神戸と福岡の基本公演を承知し、他の歓迎会程度のは全て断らせた。婦人も最初は同行だったのが、京都に長く滞在し、門司港からの出発に合わせて落ち合う日程に変更だ。

荒木 ホテルでも自由時間が増えますね。

田辺 うん。さすがに山本社長も反省したらしく。博士の時間を乱す事は遠慮するだろうねえ。

荒木 ますます都合だな。

田辺 博士はまず最初に、書面の形で抗議したんだけど、そこには「これ以上の奉仕は慈善と言う名の悪習だ」とまで強い語気がかいてあったらしく……

寺田 へえ、「慈善と言う名の悪習」かあ。

田辺 ……え？ 都合合ってる？

荒木 あ、いえ……でも、じゃあ奈良の訪問とかは？

田辺 ああ、あれは博士がぜひって希望だから……

荒木 そうですか……

田辺 お前詳しいねえ……

荒木 あ、じゃあ、僕はそろそろ。寺田先生。どうもありがとうございました。

寺田 あ、行く？

荒木 ええ。徹夜覚悟での野暮用が。

寺田 そう。じゃあまた。

荒木 失礼しまーす。

自分の湯飲みを持って去る荒木。

田辺 ……何かコソコソしてんだよなあ……

寺田 ま、もう少しどう？

田辺 ああ、すいません。

田辺に酒を注ぐ寺田。返盃。

寺田 なかなか面白いねえ、荒木君は。

田辺 はあ、その分生意気で……あ、ねえ、あいつ一人でした？

寺田 ああ、いや、もう一人居たよ、えっと……あれ？

田辺 男子ですよ、ねえ。

寺田 うん、そうそう……

田辺 じゃあ、あいつだな……あれ？

寺田 おいおい、君は教えてる生徒だろ。

田辺 いやいや、ほらほら……山崎じゃなくて……

寺田 えっとねえ……約束したんだけどなあ……

田辺 うーん……

寺田 ……

田辺 あ、常川だ。

寺田 そうそう常川君。

田辺 ええ、常川……何だっけ。

寺田 まあ、下の名前までは、ね。

田辺 いい奴なんですけどね。

寺田 うん。いい奴だけどね……

田辺 なんか企んでるじゃないかなあ……

寺田 ああ、あの2人？ え、じゃあインシユタイン絡みで？

田辺 そう。明日の視察時は要警戒だな。

寺田 ああ……ま、でも気持ちは判るけどね。

田辺 はあ……

奥からナツエが登場。以降、居酒屋気分で気楽に振舞う。

寺田 いやね、今も荒木君と話していたんだけどさあ、こういう時こそ、お偉いさん連中は、進んで若者に場を譲るべきだろうって。

田辺 ああ、インシユタイン博士との交流？

寺田 俺だって最初は業を煮やしてた。博士となかなか話させてもらえなくてね。ドン連中が独占で、連続講義の4日目にやっと赤方変位の件で話を交わしたが、博士の疲れもわかるし、何より僕の後にも列がつかえてるから、博士の貴重な質問に適当に「ヤー」「ヤー」って答えて終わっちゃった。

田辺 (冷やかし本位で) でもあれでしょ？ 情熱的な質問者もいたんでしょ？ 土井なんとかっていう。

寺田 ああ、土井不墨ね、反対性論者の。彼は別格でしょう。

田辺 聞きましたよ、石原さんから。学生の質問時間を独占して博士に意見してたって。

寺田 うん。一応長岡さんの弟子だからね、大学側も何とか合わせない努力をしてたらしい。でも講義の自由質疑までは制限できないからね。そこを見逃す土井じゃない。ツカツカと黒板に進み、自分の論文を説明し始めた。

田辺 その論文って、あれでしょ？ 石原さんが下読みさせられ、書き直しを命じたのに、連絡ナシに発表しちゃった奴でしょ？

寺田 石原君曰く「ただひとえに土井氏の相対性理論の不理解を提示するだけのモノだった」。さらに加えて「彼の『矛盾』という指摘は、そのまま「自分には解らない」という感想でしかない」

田辺 手厳しいから石原さんも。

寺田 結局4日目、自説の誤りを認め、撤回する旨の独語の文章を博士に提出し、姿をくらましている。仲間内では「また隅田川にボートでも見に行ったのさ」との噂だった。

田辺 隅田川にボートですか？

寺田 ああ、そういう前歴があるんだよ。とある教授に論戦挑んで、いざ公開討論のその日に敵前逃亡。部屋には「隅田川でボートを見てくる」のメモがあった。

田辺&ナツエ へえ。

田辺 聞きしに勝るならず者ですね。ウチの学生なんか可愛いもんだ。

寺田 いや、まあ、でもね。彼を肴に楽しんでばかりもいけないと思うわけさ、俺なんかはね。

田辺 はあ……

寺田 や、実は今度どつかで書こうと思ってるんだけど……

田辺 あ、何か嫌な予感。

寺田 聞くだけでいいからさあ。

田辺 ホントにい？

寺田 聞いて感想をくれるだけで、ほらあ。

田辺 まあまあ、

田辺に酒を注ぐ寺田。やはり返盃。どちらからも注いでもらえなかったナツエ、仕方なく自分で注ぐ。

寺田 いやね、今の土井不墨のこと一つ取ってもさ、新聞記者の中にはちゃんと土井ファンとかいるわけでしょ？

田辺 ああ、まあ、確かに。

寺田 僕はね、こう思ってるんだよ「クリストはヒトに罪人という自覚を与え、  
アインシュタインは人間に、五感の無能さを自覚させた」ってね。

田辺 えっと：

寺田 前に桑木さんにも手紙したんだけど、なかなか理解してくれない。

田辺 や、僕ももう少し。

寺田 うん。そもそも相対性理論って言葉が随分誤解されてるでしょ？ 絶対

の反対、つまり平等とか公平みたいな意味合いで。

田辺 ああ、そうですね。畑の違う人は相対でなくって「アイタイ性」って読  
んでるから、それで流行語みたいになってる。あ、後、性って文字も良くな  
いですね。やたら恋人同士の笑いや卑猥なネタになってる。

寺田 気の小さい桑木さんなんか、わざわざ「相対の論理」とかって書いてる  
よ。「性」の字を外してさ。

田辺 へえ、そうなんだあ。

ナツエ 「惚れて通えば千里が一里 主を待つ間のこの長さ おやまあ相対的  
ですな」

寺田 だって「逢いたい、性」だもんな。民衆に罪はないよ。江戸の頃、幕府  
が「心中」で言葉を禁じたから「相対死」なんて言ってたわけだし。名古屋  
辺りで流行ってるんだって、相対性ぶしとかいう狂歌まがいのが。

田辺 へえ。

寺田 島村抱月を追って松井須磨子が後追い自殺したのも記憶に新しい。でも、  
その意味じゃあ石原さんだってね。

田辺 確かに正直、人気の片棒を担いではいますよね。意地悪な記者が「講演  
盛況の最大の功績は通訳の人選である」なんて書いてた。今日だって石原さ  
ん、記者たちに囲まれちゃって：もちろん質問は原阿佐緒との愛の巣につい  
てだし：

寺田 そうなんだ。

ナツエ 「歳はとつても人には惚れる 恋の世界は美しい おやまあ相対的で  
すな」

田辺 当の本人はどこか開き直っちゃってるし。あれですかねえ、自ら客寄せ  
の広告塔になって、博士に恩返ししてるのかなあ。

寺田 ふーん。

田辺 紹介者の西田さんが、学界のお偉方に苦言を言われたそうです。  
寺田 や、でも適任だよ石原君は。だれもあんなに臨機応変には振舞えない。

田辺 ええ、僕もそう思います。

ナツエ (自分で酒を注ぎながら) 「赤い顔してお酒を飲むが 後の勘定で青  
い顔 おやまあ相対的ですな」

寺田 でね、つまりは「五感の差」なんだよ。相対性の言葉尻だけで盛り上が  
る大衆。部数を伸ばしたい一心で土井氏を擁護する記者たち。でもさ、物理  
をかじってる僕たちだって、彼らとどれだけ違うんだって。

田辺 それは：：：天才学者との差異ですか？

寺田 や、違う違う。そういう意味じゃなくて：：：じゃあ相対性理論に戻ろうか。  
この論理はあれだろ？ 平たく言えば、観測者の相対性を前提にしながら、  
法則の絶対性を論じたものだろ。

田辺 まあ、そうですね。

寺田 全ての慣性系において運動は「相対的」である。と同時にどの慣性系か  
ら観測しても光の速度は「絶対的」すなわち不変である。

田辺 ええ。確かに民衆の五感には程遠いだろうなあ。  
寺田 秒速18万キロで走る列車の乗客とそれを見る釣り人は、お互いに相手  
の1時間を1時間15分に感じ、秒速24万キロで走るご婦人は目方が2倍

に増え、走って痩せようとする彼女の目的は見事に裏切られる。

田辺 なるほど。

寺田 宇宙列車の速度もご婦人の健脚も、もちろん僕たちの五感で実感できな  
いが、それでも光の速度からすればまだまだ遅い設定だ。

田辺 確かに。人間の五感はかなり無能ですなあ。

寺田 つまりね、今まで僕たちが疑いなく判断の基準にしてきた僕たちの感覚。  
どうやらコレではダメらしい。まだ見ぬミクロな世界も、毎日見上げる宇宙  
の奥も、どうやら信じられない高速度で運動している。僕たちの緩やかな時  
間はそれに属さない。

田辺 一種の不安感：というよりは今まで味わったことのない、質の違ったシ  
ョック：

寺田 アインシュタインを経験してしまった僕たちはもう戻れない。見たまま  
聞いたままが正しいと保障された世界は、いまやはるか彼方へと消し飛んで  
しまったのさ。

田辺 寺田さん：

窓の外を眺め不動の寺田。それに倣う田辺。既にナツエは眠ってい

る。暫しの沈黙。

寺田 (吹つ切つたように) 目に見えないのは怖いからね。僕なんかその延長線上にビクビクしてしまうのさ。例えば文明。例えば戦争、作り手では制御できない新しい兵器。

田辺 そんな予見すら、不確かなんですもんね。私たちの五感では。

寺田 その通り。石原さん辺りは、それも承知で恋に生きてる気がするんだけど……ま、買ひ被りかな……

田辺 どうでしょう。

寺田 ま、でも、一つだけ確実なのはさ。

田辺 何です？

寺田 あの髪型の流行だね。

田辺 ああ、博士の？

寺田 特に貧乏学生の間では、格好の不精の言い訳だ。

田辺 確かに。

湯飲みの残つた酒を、ほぼ同時に飲み干す2人。

田辺 外で飲み直しません？ この間、石原さんと面白い店見つけて。

寺田 え、準備はいいの？ 明日の博士視察の。

田辺 ああ……まあ、朝からでいいかな。ここもついでに。

寺田 うーん、どうしようかなあ……

田辺 お強いくせに。

寺田 そんなコトはないよ、もう歳だし……いやね、アインシュタイン氏の滞在振りを聞いてちゃったんだなあ、さつき、改造社の山本氏から。

田辺 ああ、あれですね。お手製の「ノックをしてはいけない」って札。ホテルのドアの。

寺田 そう。朝、必ず短時間でも研究に没頭し、昼は与えられた日程を無難にこなす。夕には芸術談義や自身のヴァイオリン即興で昼間のダメージを消しておく。深い睡眠で翌日に頭脳に負担を残さない。

田辺 へえ。

寺田 要するに脳みそに一切負担をかけないんだな。議論にかまけて酒を飲み、

どっかでつぶれるなんて言語道断。研究者の姿じゃない。

田辺 じゃあ、その辺を(飲む仕草で) ゆっくり聞かせてくださいよ。

寺田 お前話聞いてるか？

田辺 ま、でも行くでしょ？

寺田 ……そうだな……凡才は凡才なりに、行くか？

田辺 じゃあ、ちよつと荷物あるんでこつちから。

寺田 あ、うん。

田辺 (去りながら) で、明日どうです？ 博士の視察。

寺田 (去りながら) ああ、それねえ……今回に限っては「ドンちゃん」の行動

田辺 次第なんだよなあ……

田辺 (去りながら) はい？ 誰です？

寝ているナツエを残し奥へ去る2人。変化する明かり。やがて通路側から少し疲れた様子のキョウコ。ナツエを見ながら壁際の日めくり近くに近づくと「14」から「15」。「15」から「16」に。照明変化。どうやら今夜は月夜らしい。窓辺に近づき月の光を浴びるキョウコ。やがて自ら覚醒するナツエ。

ナツエ ああ、キョウコさん。

キョウコ ばんわ。どうしたの？ こんな所で。

ナツエ うん、何か寝付けなくて。

キョウコ 寝てたよ。今。

ナツエ ン？ あ、そうか……

残つた酒をグイと飲むナツエ。

キョウコ 大丈夫？

ナツエ ちよつと迎え酒。……キョウコさんこそ何。

キョウコ ああ、ちよつと行ってきた。

ナツエ ホストクラブ？

キョウコ 何でやねん。

ナツエ じゃあ、囲碁クラブ？

キョウコ 違うわよ。……墓参り。

ナツエ え、じゃあ……盛岡だっけ？

キョウコ 花巻。

ナツエ ほー。それはそれはご苦労様でした。

キョウコ いえいえ。

ナツエ ま、駆けつけに一杯。

キョウコ いや、ホントいいから私は。

ナツエ じゃあ……遠慮なく。(自分に注ぐ)……どうでした? 風向き。

キョウコ うん。風じゃなくて光を使った。

ナツエ え、大丈夫?

キョウコ うん。どうせ後わずかだし。

ナツエ そうか……鉄道に乗ったら自分で移動しなくていいもんね。

キョウコ うん。

再び窓へ向かい月を見るキョウコ。

キョウコ ……今日は、来ないかな?

ナツエ え? ああ、ケンタが言ってた、ざる蕎麦にする雪男?

キョウコ ああ、うん……でも、ホントに雪男かなあ? 雪男が蕎麦食うか?

ナツエ じゃあ何? ケンタの見間違い?

キョウコ て言うか、どうもケンタの表現は今一つ信憑性に欠けるから……

ナツエ そうか、雪男じゃなくて……雪女?

キョウコ や、それはそれで似合わないが……

ナツエ 何で? 熱いおツユ飲むと体が解けちゃうでしょ? 食べれても限

界ざる蕎麦でしょ、やつぱり。

キョウコ ああ、ごめん。もういいや、その話は。

ナツエ ……ねえ、キョウコさん。

キョウコ 何?

ナツエ 相対性理論、強いよねえ?

キョウコ え、何? 授業の予習?

ナツエ や、そうじゃないんだけど……太郎も辛かったらうってね……

キョウコ え……なに太郎? 岡本? ウルトラ?

ナツエ やだなあキョウコさん。浦島ですよ。

キョウコ ああ、浦島、浦島太郎ね。

ナツエ 知ってますよね。

キョウコ そりゃあ、まあ……あ、知り合いじゃないけど。

ナツエ 例えば彼を亀吉としますね。

キョウコ えっと……浦島は名前があるから、カメの、ですよ?

ナツエ 太郎は太郎。カメが亀吉。

キョウコ うん……いいんじゃないかなあ、判りやすいし。

ナツエ 亀吉は、光の速度で飛ぶですよ。

キョウコ ……泳ぐのではなくて、飛ぶのね? しかも高速で。

ナツエ 白鳥座の方角に竜宮があるんですが、まあ、かなり遠いです。

キョウコ 大丈夫、ナツエさん?

ナツエ 高速で移動した浦島&亀吉は、地球のとある漁村に比べ、ゆっくり時

間が流れます。だから遊びほらけて帰ってきた浦島の3日間に対し、友吉は

30年も待つように感じる。これは友吉の理屈で、民話の通りです。

キョウコ 友吉って誰?

ナツエ 幼友達ですよ浦島の。友達だから友吉。

キョウコ いたんだ、幼馴染が。

ナツエ いるでしょ? 一人ぐらいいは。だって友達いないと、結局性格が歪む

でしょ? 歪んだ浦島はきつと亀なんか助けませんって。

キョウコ まあ、そうかな。続けて。

ナツエ でもですよ。相対的に考えれば、高速移動する浦&亀から見れば友吉

の方が高速で飛んでいるようにも見えるわけで、そうすると地球の時間がゆ

っくり流れ、友吉のたった3日を自分たちは30年にも思わないといけない

んじゃないの?

キョウコ へえ。

ナツエ 間違ってます? 私。

キョウコ ううん。あってます。それどころか相対性理論の本質を判ってる。

ナツエ じゃあ、浦島太郎の話は出鱈目なのね。

キョウコ とところがそう簡単に片付かないのが民話の持つ底力。

ナツエ どういうこと?

キョウコ ステージは特殊相対性理論から一般相対性理論へ。

ナツエ えっと……加速度が加わるんだっけ?

キョウコ そう。地球を離れる時と竜宮星から離れる時、亀吉は加速度を使う

でしょ? 乗ってる浦島はどうなる?

ナツエ えっと……(仰け反って) こんな感じかな。

キョウコ そう。一般相対性理論では加速すればするだけ、やっぱり時間はゆっくり流れるの。だから旅をしてきた浦島の方が少しだけ時間を短く感じてゐる。歳を取らないのは浦島の方ね。

ナツエ え、でも、そこそ相対的に、見送りの友吉は加速度的に離れてるんでしょ？ 浦島から見れば。

キョウコ でも（仰け反つて）こうはなつてないでしょ？ 友吉君。

ナツエ ああ、そうか…

キョウコ 見かけの重力の影響を受け、歳を取らなかつたのは、実際に加速度運動した浦島&亀吉でしたとき。

ナツエ ふーん…とき、つて何？

キョウコ さあ、私も長く疑問に持っているのだがね…

ナツエ ねえ、キョウコさん。

キョウコ 何？

ナツエ 光つてのは一瞬だよ。

キョウコ ああ、うん。

ナツエ 人は鈍いよね。鈍い上に脆い。

キョウコ うん。

ナツエ 何にも覚えてないもんね。私の時間は止まつたままだ。

キョウコ ……今日のナツエさんはおセンチどすなあ。

ナツエ 何だか目が冴えてきちゃった。

キョウコ そりゃそうでしょう、だつて。

さりげなく2枚の日めくりを見せる。

ナツエ あら、丸2日も寝てたのね。

キョウコ ま、そういうことになるかな。

奥から人の気配。鼻歌交じりの幸せそうな宮崎登美子が入室。

### 【SCENE / 3】

壁の室内灯スイッチを入れる登美子。手に持った新しいコーヒー入りのフラスコを温めようと、マツチを擦つてアルコールランプに火を点す。その間に以下のセリフ。

ナツエ どうします？

キョウコ （風を読む感じで）まだ少し時間があるなあ。じゃあ…（テーブルを見て）少し片しておきましょうか。丸2日分程度には。

ナツエ いわゆる時間経過のためのご都合あわせでんな。

適当にモノを掃けながら、これまた予想外の場所から去る2人。やがて舞台奥からゆっくり寺田が入室。

寺田 ……あ、あの、宮崎さんさあ…

登美子 （振り向かず）登美子でいいですよ。

寺田 えっ？

登美子 （振り向いて）だから、登美子で。

寺田 あ、いや、それはやっぱ不味いでしよう。学内だし。

登美子 ああ、そっかあ…（あくまで嬉しそうに誤解して）ウフっ、そうですよね。

寺田 や、何か、そういう意味じゃなくてね。

鼻歌で作業に戻る登美子。かなり憔悴している寺田。

寺田 一つだけ確認しておきたいんだけど、今日僕たちが逢うことになつてたつて事だけは、やはり伏せておく方が賢明だと思うわけだよ。

登美子 あくまでお忍びですもんね。

寺田 うん、そう、つまり…

登美子 なんかドキドキしますね。

寺田 ……あ、や、そういう意味じゃなくてね。

登美子 どうぞ。

寺田 ああ、ありがとう。

あくまで幸せそうな登美子。複雑な寺田。同時に一口。

2人 熱っ。

登美子 あ、ごめんなさい先生。フーフーしましょうか？

寺田 ああ、いや、自分で…

フーフーする2人。やがて寺田、自分の行為に気付き止める。

寺田 …確かに僕たちは待ち合わせてお茶をしていた。そして新しい活劇を見に行く約束もしていた。でも君が明治屋で、僕に今夜の計画を話した時点で、僕たちは活劇を諦めた。

登美子 いいんです私。それに活劇よりも今のほうが楽しいし。

寺田 ああ、そう…。

登美子 でも寅彦先生の立場もちゃんと判っております。私、分ならず屋な女ではありません。

寺田 そう、だよね。

登美子 黙っていますわ。お茶のことも活劇のことも。

寺田 ああ、うん。ぜひ、それで。

再び立ち上がり、鼻歌で窓辺で花に水をやる登美子。

寺田 …でも、何か悪かったね。

登美子 (振り向かず) え? 何です?

寺田 その、なんて言うかな、僕が君から、たまたま計画を聞いちゃって、僕は立场上仕方なく田辺さんに報告したけど…何? 君にとつては大切な仲間を裏切る行為でしょ? 悪い事したなあって…

登美子 先生。

寺田 え、何?

登美子 (おもむろに振り向き最高の笑顔で) 全然♥

寺田 …あ、そう…やっぱ君は家に戻った方がいいんじゃないかなあ? もう

遅いし、門限も…

登美子 (歩み寄り見つめて) いや♥…

寺田 ……

(田辺の声) すいませんねえ、お待たせして…

奥から田辺がメモ代わりのノートを持って入室。自然に立ち上がる寺田。少し寺田との距離を縮める登美子。

田辺 直に解決すると思いますよ。残った学生達を走らせましたから。学内に潜んでるだろう荒木とホテルの裏口。そこで石原さんところ。

寺田 え、石原さんも?

田辺 ああ、一応博士の確認も取ったほうがいいかなって。

寺田 ああ、そうだね。

登美子 ホテルの裏口って彼の確保ですよねえ、えつと…

2人 …(顔を見合わせる)…

登美子 ああ、そう常川君。

2人 …そうそう。

登美子 あの何か?

2人 いや…

寺田 ホントすいませんでしたねえ…

田辺 え?…寺田さんが謝る話じゃないでしょ?

寺田 ああ、まあ、そうなんだけど…

田辺 (ノートを開いて登美子に) んで? さっきの続きだけど、昨日のアイ

ンシュタイン博士の学内視察の間に、こっそり手紙を渡したんだな?

登美子 ええ、はい。詳しくは知りませんが、常川君が変装して博士に近づき、

こっそりコートのポケットに入れる段取りで…

田辺 変装って?

登美子 さあ:「ちよび髭親父」としか…

寺田 ちよび髭親父かあ:変装というより仮装だなあ、それは。

田辺 あ!

登美子 何です?

田辺 いたいた。背の低いちよび髭親父。時々視界に入って…コソコソ頃合い

を計ってたんだな。(寺田に) いや、てつきり最初、学生の出し物なのかと

思ってたんですよ。あれがあいつかあ…

寺田 ああ、結構似合いそうだなあ。

田辺 文章は?

登美子 ああ、それは荒木君が。独語で。

田辺 ま、そうだろうな。で、後はと…あれ? でも寺田さんはどうやって

彼女から情報を?

寺田 ああ、それはさあ…

登美子 私からお声掛けしたんです。お稽古事の帰りに駅前でお見かけして。

正月休みの課題の赤方変位について質問したくて。先生は困った顔一つせず  
に相談に乗って下さいました。

寺田 ……

田辺 じゃあ、その会話の中で、ボロツと？

登美子 いえ、私からお話しました。

寺田 えっ？

登美子 荒木君から話を持ちかけられた時、面白いつて思う反面、やりすぎじ  
やないかなとも思っていたんですね。でも、結局荒木君の熱い眼差しに押し

切られて……

田辺 ああ、そう……

登美子 でも良かれと思った判断とは言え、友達を裏切ったことには変わりな  
いし……今もそれがとても辛くて（顔を伏せる）……

田辺 （寺田を見て）……

寺田 ……や、まあ、それもあつてね、彼らと顔を合わす前に家に帰るよう勧  
めていたんだけどね……

田辺 ああ、そうですね……

登美子 （寺田）送ってくださいますか？ 先生。

寺田 えっ？

登美子 この場合は田辺先生にお任せして。

田辺 ああ、いいですよ、それで。

寺田 えっ？

田辺 寺田さんさえご迷惑でなければ。

寺田 ああ……じゃあ、まあ。そうしますか？

登美子 （礼をして）ありがとうございます。

寺田 じゃあ、まあ……すぐに戻りますんで。

石原 どもどもども……ああ、寺田さん。

奥から入室する石原。

寺田 やあ、何かすまないねえ、夜半に……

石原 え？ 寺田さんが謝る話じゃないでしょ？

寺田 ああ、まあ、ねえ……

登美子 （ねだる様に袖を引つ張る）……

寺田 あ、じゃあちよつと、その辺まで彼女送ってくるから。

石原 ああ、はいはい。

登美子 失礼しまゝす。

寺田 後ほど……

「その辺までつて……」「まあ、いいからいいから……」などと会話し  
ながら去る登美子と寺田。

石原 （2人が去った方角を指差し）宮崎登美子さん。

田辺 すいませんねえ、とんだ騒ぎで。

石原 いいんじゃないですか？ いろいろあつた方が。

田辺 大体聞いてもらえました？

石原 ああ、うん。連絡くれた君の学生さんから。

田辺 アインシュタイン博士は？

石原 うん。ちゃんと自室に居ましたよ。お疲れの様だったから、細かいこと  
までは話さなかったけど。ああ、そうか。奴らが渡したメモとか回収すべき  
だったかな？

田辺 あ、いえ、そこまでは。出来れば穩便に済ませてやりたいと思つてまし  
て、教授会にも内緒で……

石原 まあ、そうだよ。判る判る。

田辺 じゃあ、ひよつとしたら博士もメモて言うか、荒木の嘆願書を見てない  
可能性もありですね。

石原 十分に。昼間もそんな素振り無かつたし、よく物失くす人だから。

田辺 えつと……今日はどんな行動だったんです？ 博士。

石原 ああ、うん。もつぱら観光だね。午前中に西本願寺を参拝して、午後は  
ちよつと足を伸ばして琵琶湖まで。三井寺も見て帰つてきた。

田辺 じゃあ、それまでに接触の可能性はないな。

石原 大変だな、田辺さんも。あ、一杯もらおうつと。

例のフラスコから飲み物をビーカーに注ぐ石原。

石原 思い出すよね学生時代。いつもビーカーで飲んでた。お茶も酒も。

田辺 ああ、ちゃんと、あるんですけどね。そつちに。

石原 ああ、何だ、そうなの？

田辺 出しましょうか？

石原 や、いいよ、これで。(一口飲んで) ああ、そうそう、日程の話で思い出したけど、今日、博士が妙な事言い出してね。何でも、一昨日の夜、変な夢を見たそうでね。

田辺 夢、ですか？

石原 かのアインシュタイン氏がさ、何でも自分が雪達磨になってこの理学部を訪問する夢らしい。

田辺 雪だるまですか？…ま、季節は合ってるか？

石原 その夢の中でザル蕎麦を食べていたら、一人の少年が黒板に数式を書き出した。お陰で、旅の残りの日程は楽しく過ごせそうだって。

田辺 そんな？

石原 や、基本的にはそれだけ。それだけ言い終わると、博士は紙と鉛筆を持ち出して「よし、では、少年の続きに取り掛かるう、石原君はこつち側を計算してくれ」って。

田辺 え、それは何？ 予知夢って話？

石原 ああ、そう言えば、かのフロイト教授もユダヤ人だったよなあ…。

田辺 や、でも実際雪ダルマってのは…

石原 ジャパニーズ、マジックだって。

田辺 まあ、実際博士には、ココも一瞬通ってもらったんですけどね…

石原 ああ、昨日の視察時ね。

田辺 あれ？…これは…

前のシーンで荒木が書いた黒板の数式に目を留めている田辺。やがて無情にも黒板消しで消しながら…

田辺 まさかね。

石原 ああ、後ね、帽子がないって言い出してね。

田辺 え、帽子ですか？…(床のESのメモにも気付き) あらま、ココにも(消しながら) ったく誰だよ…ああ、すいません。

石原 昨日の視察の後、ホテルに戻ってからね。さあ、どこで忘れただろうって皆で記憶を手繰っている最中に、博士がね「や、ちよっと待って」と遮って「京大理学部…ああ、あれはそうかあ…」とか呟いて、お開き。で、

実際次の朝にはちゃっかり被ってた。

田辺 全然判らんです。

石原 うん俺も。…やっぱ根本的に違うのかな？ 頭脳の構造が。

田辺 え、でもじゃあ、帰りの列車は計算尽くですか？ 今日。琵琶湖。

石原 そう。電磁場エネルギーのテンソルなんだけどね、特にインストローペン物質においての…

田辺 じゃあ編微分ですか。

石原 でもこれが、結構手強くて。残った訪日日程は全部掛かりそう。

田辺 へえ。でもそれはそれで羨ましいなあ。石原さんと博士が膝を突き合わせて計算するのは…

石原 うん。博士はね、共同発表しようなんて言ってくれてるんだけど、ま、夢の夢だね。

田辺 凄い話じゃないですか？

石原 博士なりに狂った僕を何とかしようとしてくれるんだね。それだけで感激だよ。僕だけの特別講義。最高のご褒美だ。

田辺 …復帰してくださいよ。コレを機会に。

飲み物をぐっと飲む石原。

石原 ありがとう、田辺君。

田辺 いや、その…

石原 でもね。さつきも君の学生が来るまで、僕の頭は阿佐緒で独占されていたよ。僕の不在の間に、誰か訪ねて来やしないかってね。阿佐緒に惚れてる多くの輩の行動を中傷し、少しでも予防線になるよう歌を送ろう。阿佐緒の心を繋ぎとめる言の葉は何だ、ってね。

田辺 石原さん…

石原 僕はこれからどんどん悪くなる。これが最後って予感がしてる。あ、そうそう。面白い小唄を見つけてね。

田辺 小唄、ですか？

石原 うん。独語で「アイン」は一つって意味だろ。そしてストーン、いわゆる小石が「シュタイン」だ。

田辺 ええ、でもそれは…

石原 じゃあ石原って姓からアインシュタイン、すなわち「一つの小石」を取

り除くどうなる？

田辺 えっと……あつ……

石原 そう、「原」だよ。原阿佐緒が残るのみ。僕は博士の帰国まで、物理学者として最後の部分を燃焼させる。で、それで終わりだ。最高の区切りだよ、人生の。

田辺 石原さん……

石原 いやいや、どうもいけないね。話せる奴が身近に居ると、どうも調子に乗りすぎる。堪忍してくれたまえ。

田辺 いや……

石原 ああ、そうそう。学生に目光らせるのもいいけどさあ、お宅の関係でもう一人いたよ。上手く間隙を縫った奴が。

田辺 え？ 面会ですか？ 博士への？

石原 うん。ちょうどほら、公会堂で一般講演のあった夜。エルザ婦人が一人のところに参入し、上手く取り入って、そこへ博士が帰ってきた。

田辺 え、誰です？

石原 山宣だよ。

田辺 ああ、山本宣治……ウチの名物教授ですか……

石原 生物学に性教育、や、今では一端の社会運動家かな？ なんだっけ、ほら「生物学から見た処女性」って論文の。

田辺 ああ「成年男子よ。吾人は須らく処女膜を超越せねばならぬ」ですね。

石原 そうそう。

田辺 で、論戦を迫りに行ったんですか？

石原 や、僕も稲垣さんからの受け売りなだけだね……早い話、自分の翻訳したニコライ教授の著書に推薦文をもらいに行ったんだね。

田辺 ああ、ニコライ教授って無骨な平和主義思想の……確か、アインシュタイン博士とも歩調を合わせて……

石原 うん。有名なニコライ・アインシュタイン反戦宣言だな。山宣としては、その辺のコネを最大限に利用し、ちやっかり自分の関係書籍の宣伝に結びつけようって寸法さ。でもほら、山宣ってどこか軽妙で、憎めないところあるじゃない。過激な事言っても嫌味にならないみたい。

田辺 上手いんですよ、自嘲的に振舞ったり、さっさと手の内ばらしたり。

石原 ま、だから人気も出るんだろうけどさ。

田辺 で、事の運びは？

石原 帰ってきた博士と暫し歓談した後。いよいよ「序文をいただけないか」

って切り出した。博士は一杯食わされたかつて感じて悪戯された子供のように顔を曇らせたらしい。でも平和のためにと粘る山宣にととうとう折れて、執筆を約したんだって。

田辺 へえ。やるなあ。

石原 ココまでなら別に君に話すような事でもないんだがね。

田辺 やっぱ論戦を挑みましたか？

石原 や、真逆なんだな。

田辺 と言いますと？

石原 首尾よく目的を果たし、現金にもそろそろ退室しようかと別れの言葉を告げようとする「暫し待て」と引き止めたのは博士のほうだった。

田辺 ホントですか？

石原 ココからが大変さ。平和運動に知的階級が欠かせないとする博士と、知的階級を初手から弊害と位置づけ労働者運動にこそその活路を見出す山宣が、穏やかな論議をするはずが無い。議論は深夜にまで及んだそう。

田辺 じゃあ博士も一歩も引かずに？

石原 山宣の上を行く反戦論だね。山宣は学生を一人連れて行ったんだけど、彼は「あんなに強い口調で軍国主義や排他的愛国主義を非難する学者は初めてだ」って感激していたらしい。

田辺 へえ……で、石原さんはそこから何を言いたいんです？

石原 お、鋭いねえ田辺先生は。導きたい結論はこうさ。つまり、博士は僕らが考える以上の柔軟さとパワーを持っている。ゆえに、迷ったら体当たりも得策って事だな。

田辺 荒木俊馬の発想も悪くないと……

石原 もしかしたら本当に上手く接見できたかもね。そうしたら彼らにとつては大きいぜ。今後の学界背負う奴らには……

田辺 かと行って見逃すわけには……

石原 もちろん無責任な立場だから言える事なだけ。

田辺 ……や、でもですねえ……

寺田 戻りましたあ。

奥から現れる寺田。なぜか部屋の中に進んでこない。

石原 ああ、お疲れさん。  
田辺 悪かったですねえ……  
寺田 ついでに別なの拾っちゃって……（奥へ）入れよ。

奥から幾分殊勝に入室する荒木。田辺に正対する。

荒木 どうもすいませんでしたあ。

田辺 ……（ゆっくりと背を向ける）

寺田 ……あまり怒らないでやってくれますか？ 僕も一昨日の夜、煽るような

発言しちゃったし。

田辺 ……ええ。判ってますので。

石原 ……まあ、座れよ。

荒木 はあ……ところで常川は戻ってますか？

石原 や、まだじゃないかな……

荒木 大丈夫かな……

石原 ああ、この寒空だしね。

荒木 ええ、それもそうなんです、細かい打ち合わせが不十分で、もしかしてまた変装して行ってやしないかと。

寺田 ああ、噂のちよび髭？

石原 え、何？ それ。

振り向いて机をバシッと叩く田辺。止まる空気。

田辺 なぜ相談しない！ せめて一言！

荒木 ……先生……

田辺 大胆さと無謀さは違うだろ。論理さえ正しければ人に迷惑をかけていい

のか？ そこを守るべき最低限のルールは無いのか！

2人 ……

荒木 ……先生……

田辺 気に入らないのはどうせ退学には出来ないだろうというお前の計算だ。

人を試すな。人を試してはいけない。

荒木 ……すいませんでした。

2人 ……

田辺 そんなに頼りないか？ だったら目に物見せてやる。

寺田 田辺さん？

田辺 汽车租赁を工面しておけ。お前も常川もだ。明日の夜、奈良ホテルの博士

を襲う。ギリラ作戦だ。（机を叩いて）「ヤー、オーダー、サイン？」

荒木 ……「ヤー！」

田辺 あ、でも日帰りだからな。

荒木 ……はい。

常川 あのお、お取り込み中すいませんが……

見れば通路側に肩で息している常川。

石原&寺田 （\$）ああ、常川君。

田辺&荒木 （\$）おお、常川。

常川 へ？……あ……（へたへたと倒れこむ）

田辺 あ、おい、大丈夫か？

常川 嬉しいです、とても。皆で僕の名前を……

田辺 それはいいから。どうした？

常川 すいませんが水を一杯。

荒木 あ、うん。（如雨露を渡す）

常川 ありがとう。（ググツと飲む）

3人 ……

荒木 どうしたんだ？ 汗びっしょりで。

常川 走ってきたんだよ。全速力で、そしたら……

荒木 そしたら？

常川 皆で僕の名前読んでくれて、嬉しくて……

荒木 だから、そこは判ったから。

常川 え？ あ、そうか……あ、そうそう。（教授陣に）大変なんです。

田辺 だから何が？

常川 行方不明だそうです。その伝言を頼まれて。

寺田 だから誰が？

田辺 もしかして……

常川 アイシシユタイン先生です。エルザ婦人が血相変えて……

石原 まさか……

寺田 石原さん。  
石原 ああ、うん。

慌てて通路側へ飛び出す石原と寺田。

田辺 お前たちはココを動かすなよ。  
荒木 ああ、はい。

追って去る田辺。如雨露の水を飲み干す常川。

荒木 …なあ、まさか人払いの狂言じゃないよね。

常川 え？ 違うよ、ホントにホテルから…

荒木 じゃあつまり、博士が僕たちに会うために外出している可能性も残って

いるんじゃないだろうか？

常川 …ああ、確かに。

荒木 お前は門の辺りを。俺は校舎の入り口回るから。

常川 ああ、うん。

奥へ去る2人。クロスで始業のチャイム。入れ替わり入室するキョウコとケンタ、そして山崎先生。

キョウコ 起立。

ケンタ 礼。

ナツエ (駆け込んで座りながら) 着席。

山崎先生 お早うございます。

3人 お早うございます。

山崎先生 さて今日はと…あれ？ 何だか久しぶりな気がするなあ…

ナツエ 長かったからねえ、ダイアログが。

ケンタ て言うか先生ゲストに頼りすぎ。

山崎先生 確かに物語に掛かる加速度を、少し放って置きすぎたかも知れないな。でも諸君。今さら新しいゲストは望めない。いささか駆け足でこの單元をまとめるので、ちゃんと付いてくるように。

3人 ほうい。

山崎先生 さて、今まで見てきたように、大正時代のこの国は、アインシュタ

インの訪日を経験し、様々なショックを体感した。折からのデモクラシー機運、科学ブーム、国の欧米化政策の打算、お祭り好きな国民性、民間主導だからこそ大胆に展開した改造社の宣伝活動、そして何より、常に穏やかで時に激しく、誰にも平等を貫いたアインシュタイン博士の気質、人となり。多分これらの全てが偶然のバランスで成立し、国民の十分すぎる誤解と科学原理の不勉強をもともせず、ブームは最高潮に達した。そして…

ナツエ やっぱ出番無かったね、桑木のおっちゃん。

ケンタ やっぱ基本はダイアログだからさ。

ナツエ そうか、加速度とは、つまりって会話のことだったのね。

山崎先生 (咳き払い) そして、それは各界のリーダー達にも平等に降り注い

だわけだ。科学界のホープだった松沢、萩原、そして湯川秀樹。思想界では三枝、戸崎。経済学の福田と左右田。有形無形、大なり小なり影響を受けた後世の著名人は枚挙に暇が無い。むしろ、反感や無視も含めて、このショックとどう立ち向かうかが試された。何らかの立場を表明せざるを得ない、それ位、大きな波紋だったと言えるだろう。

ケンタ まるでリトマス試験紙だな。

山崎先生 文学界では有島武郎が博士のヴァイオリン演奏に耳を傾け、横光利一は論理を作品に取り入れようと悪戦苦闘している。ただ面白い事に、当時の文壇の中核連中は、博士ともブームとも触れ合うことを拒絶したようだね。志賀直哉、菊池寛、さらには芥川龍之介までもが見事に沈黙を貫いている。そして、この授業で何度も朗読会をしてきた宮沢賢治。彼については…やはりキョウコ君かな。

キョウコ はい。いろいろ調べてみました…やはり賢治先生とアインシュタイン博士、残念ながら実際出会ってはいないようです。仙台での一般講演という目と鼻の先に接近しながらです。それには悲しい理由がありました。賢治先生はこの年の11月27日、最愛の妹・トシ子を失い、長く慟哭していたのです。

ケンタ 11月27日。ちょうど博士が東京に居た頃か。

ナツエ 東大での連続講義4日目ね。

キョウコ ですが…やはり賢治先生はアインシュタインの相対性理論に何らかの影響を受けていると推察されます。確かに作品や文章にこそ明確な名称は出てきませんが、博士の来日を境に「第四次元」という言葉が頻繁に出て

くるのです。さらに、この頃書かれた「春と修羅」。この生原稿には用紙の余白に「ミンコフスキー」とか「アインシュタイン先生」などといった走り書きが確認できます。おそらくこれらから類推するに……

山崎先生　そこまでだね、キョウコ君。

キョウコ　……えっ？

山崎先生　推察や類推はこの授業では扱わない。そこまで手を広げたら科学の域を超えてしまう。

キョウコ　先生……

山崎先生　どうしても言うのなら、それはキョウコ君の宿題だな。

キョウコ　でも、宿題と言われましても……

山崎先生　もしくは研究テーマかな。

キョウコ　先生……

ケンタ　研究テーマかあ、何だかカッコいい。

山崎先生　かくして世紀の天才アインシュタインは散々話題を独占し、全43日間の訪日日程を無事に済ませ、門司港から帰路に付いた。博士を乗せた日本郵船「棒名丸」は静かに母国へ向かっていった。アインシュタインという名の「たった一つの石」の衝撃は、彼の帰国後も日本全土にゆっくりその波紋を広げて行った。

ナツエ　めでたしめでたし。

ケンタ　いわゆるチャンチャンでんな。

山崎先生　では最後にもう一度、この公式に立ち戻ろう。イーイコールエムシのじじよう。はい。

2人　イーイコールエムシのじじよう。

山崎先生　うん。この一見シンブルな公式が、シンブルゆえに予想もしない展開を孕んでいた。ケンタ。mは何だった？

ケンタ　えっと、確か質量。

山崎先生　その通り。ちゃんと復習できてるじゃないか。ナツエ君、cは？

ナツエ　光の速度ですね。私たちが考えうる最高の速度。そしてコレは相対性理論において、あくまで絶対的な値です。

山崎先生　素晴らしい。君たちを生徒に持ったことを、私は誇りに思うよ……皆も気付いているだろうが、今日はここでの最後の講義だ……では、キョウコ君。

キョウコ　はい……Eはエネルギーを示します。

山崎先生　……もし何らかの方法で、ここにある一つの粒が外からの力で破壊されたらその質量はどうなるかな？

キョウコ　はい。分裂により何らかの質量が失われます。

山崎先生　じゃあもしこの小さな粒が、ウラニウム235だったとしたら？

キョウコ　はい……

ゆっくり立ち上がり黒板の数式に進むキョウコ。

キョウコ　仮に中性子1個をぶつけると中性子2個が放出されます。その分質量mは小さくなる。しかし、このエネルギー・質量等価の法則により、その分のE、すなわちエネルギーも同時に放出されることになります。

山崎先生　素晴らしい回答だ。では諸君。もしこの分裂に連鎖反応が可能な技術が加われば、どうなるかな？

ナツエ　もういいよ、先生。

山崎先生　ナツエ君……

ナツエ　このままじゃダメなの？

キョウコ　……ナツエ……

ケンタ　ダメだよ。

2人　えっ？

山崎先生　ケンタ……

ケンタ　逃げちゃダメだよ、ナツエ。この一線を越えない限り、僕たちは何処へも行けない。

キョウコ　ケンタ……

3人 (ESの声) (独語で) こちらで良かったですかねえ？

3人　えっ？

いつしか入室している老アインシュタイン。

キョウコ　あなたは……

ES (独語で) どうも今晚は。(ケンタに) おお、また会ったねえ、マジカルボーイ。

3人　……

山崎先生　では諸君。最後のゲストを迎えよう。ようこそ博士。

ES (独語で) えっと…通訳の方は…

山崎先生 いえ、ココには通訳はいません。それにアナタは今、私たちと話が出来るはずですよ。現に判つてるでしょ？ 私の言葉。

ES ……どういう、ことだね？ 夢なのか？

山崎先生 構いませんよ、その解釈でも。

ES ……どうやら私を呼び出した学生とは、違う面々らしいが…

山崎先生 そうですね。やはり彼らとは会えませんでしたか。

ナツエ きっと、どちらかが加速度的に動いたのね。

ケンタ だから待ち合わせ時間がずれてしまった。

ES (感心し微笑んで) ほう、何者ですか？ アナタたちは…

山崎先生 まあ、どうぞ。

いささか警戒しながらも、勧められた椅子に座るES。

山崎先生 では博士、早速質問させてもらつてよろしいでしょうか？

ES 石原君はいないのか？ 稲垣さんは？

山崎先生 この期に及んで、まだ1922年に逃げ込むつもりですか？ 博士。

ES 何？

山崎先生 キョウコ君、先ほどの質問の答えを。

キョウコ えっ？

山崎先生 核の分裂がもし連鎖的に反応すればどうなる？

キョウコ はい……例えば上空580mで小さな粒が分裂すると、1万分の1

秒後に約28mの火の玉に膨れ上がります。表面は摂氏30万度。そして1

秒後、火の玉は直径280mに膨れ上がり、瞬く間に屋上にいた私たちを飲

み込みます。摂氏5000度。これは決して推測ではない…。

ES そ、それは…中性子の弾丸……ジェームス・チャドウィックの…

山崎先生 ほう。どうしてご存知ですか？ 1932年発見の中性子を。

ES 1932年？…

山崎先生 そうです。そして翌33年。ヒトラーが政権を取り、ナチスはユダ

ヤ人のあなたから名誉市民権を剥奪した。貴方の首には5000マルクの賞

金が掛けられた。

ES ヒトラーか…あいつは危険だ。早々に亡命を考えなくてはならない。決して好ましくはないが、やはりアメリカか……

山崎先生 同年10月17日。亡命のためプリンストンに到着。そして6年後

の1939年7月、あなたはハンガリー出身の亡命物理学者、レオ・シラー

ドの訪問を受ける。

ES 核分裂の連鎖反応？ 何てことだ。私はそのようなことを考えてもい

なかった！

山崎先生 そして貴方は当時の米大統領、ルーズベルトに送る1通の書類にサ

インをした。その提言により、原子力爆弾の研究開発は急ピッチで行われた。

肩の力を落とすES。いつしか、ゆっくりと黒板の文字を消し始めて

いるケンタとナツエ。立ち尽くしているキョウコ。

ES ……うん。そう。そうだった気がする。

ケンタ (消しながら) 僕はベースボールの選手になりたかった。日が暮れて

もずつと原っぱで遊んでいたかった。

ナツエ (消しながら) 私は看護婦さんになりたかった。いつもベッドで笑わ

せてくれる、あんな人になりたかった。

ES じゃあ、この子達は…

キョウコ 照準点063096。投下目標の相生橋を少しずれて、それは私た

ちの真上にやってきました。嶋病院の屋上は疎開の出来ない入院児童を集め

て、朝の朗読会の最中でした……宮沢賢治の詩を耳にしながら、私たちの時

間は止まりました。加速する光の中で、私たちの素粒子も、高速で飛び散り

ました。全ては一瞬だったよね。痛くもないし、苦しくもないし。ただ、あ

まりに一瞬すぎて、石炭袋の直前で張り付いてしまっただけ…

ケンタ (消しながら) イーイコールエムシーのじじよう。

ナツエ (消しながら) イーイコールエムシーのじじよう。

ES ……

山崎先生 貴方を責める気持ちはこれっぽっちも無いんです。むしろ貴方は利

用された。あなたのサインは確かに効果が絶大だったが、結局、米国は開発

研究の場に貴方を呼びもしなかった。貴方は投下の日時さえ知らされず、市

民と同じニュースでヒロシマを知った時、誰よりも熱い涙を流した。

ES いや、情報に対しては甘かった。ヒトラーが先に原爆を持つという噂話。

あの懸念が理由の無いものだど知ってさえいたら、決してサインはしなかつ

た。心配性は昔から、私の大きな欠点の一つだ。事実、原爆投下の3月前

にヒトラーは自殺をしたらしい。

**山崎先生** 貴方とこの国は奇跡的だった。貴方はこの国の国民の、欠点も弱点も知った上で、なおこの国を愛し通した。国民の多くも貴方と知り合えて幸せだった。ほんの小さなすれ違いが、結果的に両者を遠ざけた。

**ES** あの大戦が終わり、稲垣君が日本へ来ないかと招待状をくれたよ。もちろん平和会議のお誘いだ。私は残念だが出席は出来ないと手紙を書いた。何よりも怖かった。再びこの地には戻れない…小心の自分がいた。

**山崎先生** …貴方をこの地に運んだ「北野丸」は戦火の中、軍用船となり1942年3月、フィリピン沖で機雷に触れて座礁しました。帰路を担った「棒名丸」も同じ年に沈んでいます。貴方の留守にホテルを襲った山宣は、京都から代議士になり、悪法に反対票を投じたその日に右翼に刺され死にました。京大の田辺は70歳の高齢で立て続けに論文を出版し、桑本は終戦間近に疎開先で亡くなりました。恋に生きた石原は、アメリカ兵の運転する進駐軍のジープにはねられ、それが元で死亡。診察したのは何の縁か、かの斉藤茂吉の息子でした。貴方を招いた立役者、改造社の山本は……

**ES** もういいよ。プロフェッサー。

**山崎先生** え…

**ES** 私も既に、いないんだろ？

**山崎先生** …博士…

**ES** やつと君の目的がわかったよ。未練を切れず、彷徨っているのは、どうやら私の方らしいね。

**山崎先生** 博士…

黒板を消し終わったケンタとナツエがうな垂れて立っている。

**ES** (独語で) 来なさい。

おどおどと近づく少年と少女。とある距離で、自ら力強く抱きしめるES。やがて二人の顔を覗き込み、ゆっくりと頭を撫でるES。何度も何度も。やがて静かに離れるケンタとナツエ。

**ケンタ** じゃあ、行くか。

**ナツエ** 楽しかったよ、先生。

**山崎先生** うん。すぐに会えるからね。そうだコレを…キョウコ君も。

ラムネのような駄菓子を3人に与える山崎先生。

**ケンタ** ラムネだ。食べていい？

**山崎先生** うん。列車の酔い止めも兼ねてるから。君たちも。

**ケンタ** やったあ。うんめえ…

嬉しそうに食べるケンタ、ナツエ。遅れてキョウコ。

**ケンタ** じゃあ(敬礼して)先生。

**山崎先生** うん。ダイゴによろしく。

**ナツエ** (キョウコに) 先に行ってるね。席取っとく。

**キョウコ** うん。

奥へ去るケンタ、ナツエ。ESに歩み寄るキョウコ。

**キョウコ** (独語で) お急ぎ下さい博士。まもなく汽車が来ます。ぜひ一緒に列車で。

**ES** ケンジ・ミヤザワですね。ほとんど読んでます。亡命先にこの国から送られてきていたんです。だから「トウシク」の意味するところは良く判る。でも多分、私はまだ切符を持っていない。

**キョウコ** いえ、そこに。

**ES** え?…:(コートを探り)これは…:この石は?(キョウコを見て)それに先ほどの会話…:そうか、あなたでしたか、私に忘れた帽子とこの石を…

**キョウコ** いえ。それも違います博士。私は貴方にその石を頂いたんです。私はそれを返しただけ。

**ES** (独語で) どういうことですか?

**キョウコ** まだ雪浅い日光は東照宮の門の前、貴方は担任の先生の祝辞に飽きて、私の頭を撫でました。そして私に帽子をかぶせ、ポケットからこの小石をくれたんです。

**ES** …あの時の少女…:そう…:そうでしたか…

**キョウコ** もちろん独語の意味を知ったのは、家族と友にヒロシマに出てきた

後でしたが……

ES そうでしたか……

山崎先生 父親の居なかつた彼女はそれ以来、ずっと貴方にあこがれた。人の出合いは最初の一瞬で決まります。

ES まるでビッグバンのように、ですか。

山崎先生 貴方の住所を調べ上げ、宮沢賢治を送っていたのも彼女です。

ES なるほど……ん？

いつしか机にもたれ眠りかけているキョウコ。

ES これは……

山崎先生 いささか可愛そうな気もしますが、彼女はココに残ります。

ES (独語で) なぜです？

キョウコ (少し覚醒し) 先生？……

山崎先生 キョウコ君。今までありがとう。君は最高の生徒だったよ。そして、君ならきっと大丈夫だから。

キョウコ 先生……(眠気に勝てず伏せる)

ES さっきのラムネですね。じゃあ貴方の後を？

山崎先生 彼女にはもう一人いますから。

ES (独語で) なるほど。ケンジ・ミヤザワですね？

山崎先生 博士。貴方は稲垣氏からの再来日の誘いを断る手紙の中でこう書いている。「日本人は戦争に勝たなかつたという幸福な立場にいる」と。

ES (独語で) ええ。

山崎先生 負けた事から学び、ヒロシマ・ナガサキから学び、全ての武力から遠ざかってきたこの国のも、そろそろ限界のようです。

ES (独語で) 憲法ですか？

山崎先生 はい。実に長い時間をかけて、国民は骨抜きにされてきた。巧妙な下準備。一時期は教育の手を緩めてまで：政治への無関心、数の論理：貴方を迎へ貴方と議論したような無骨な学者はもういない。

ES 迷っているのですね、貴方も

山崎先生 ……

ES ヤーオーダーナイン？ 汽車が出ますよ？

山崎先生 ……博士……

自らのコートと帽子を、ゆっくりキョウコにかけるES。

ES 思い切って託すのです。若い力を信じて。

山崎先生 ……そうしましょう。

奥へ向かう2人。

ES 君達はあれだな。観測すると動かないのに、目を離すと定まらない。まるで電子のような人だね。

山崎先生 え……認めるんですか？ 死ぬまで認めなかつた量子力学を……

眠っているキョウコを残し舞台暗転。

【SCENE/4】以下の会話にクロスしてゆっくり明かりが入る。少しだけ時間が経過した京大の物理準備室兼学生控え室。桑木の話を目撃した田辺と荒木が聞いている。

桑木 ……なもんだからもう大変だったのね。博士は博士で自慢のヴァイオリンが聞かせられずに残念そうな顔してるし、かといってそれから段取り直すわけにもいかなしで……ねえ、聞いてる？

田辺 ああ、ええ。え、でも結局、門司港へは無事着いたんでしょ？

桑木 着いた着いた。あ、それでね。埠頭に向かつてる途中、路上で正月の餅つきしてたのね。博士が興味持ちちゃって、何度も何度もついたのね。

荒木 へえ。最後の最後まで好奇心の塊って感じですね。

桑木 あのヘアスタイルにネクタイを鉢巻にして。隣のエルザ夫人が腹抱えて笑ってた。

田辺&荒木 へえ。

桑木 あ、そうそう知ってる？ 博士と同行中に、博士が葉巻を取り出したのね、んで、僕と石原君が同時にマッチを擦ったんだね。そしたら博士、僕の火のほうを選んだんだよね。

田辺 もう自慢はいいですから。それに、今のは最後の日じゃないんでしょ？

桑木 うん。来日してすぐ……あ、ちょっと待ってね。(手帳に視線)

荒木 (田辺に) 何かここぞとばかりに喋ってませんか？

田辺 きつとあれだな。博士はより喜ぶ方のマツチを選んだんだな。気配りの人だから。

荒木 ああ、落ち込まない方を断つたと。

田辺 そうそう。

桑木 え、何の話？

田辺&荒木 いや、別に。

桑木 そう？ あ、それと東大の連続講義の4日目にね、博士は珍しく本を持ち込んだんだけど、それを講義の後で忘れられてね。それ、気づいて持っていったのも僕なんだよ。

田辺 あの、もう判りましたから、ぜひ見送りの話を…

桑木 ああ、そうねえ…さすがに待合室ではみんなしんみりしちゃったね…

…博士は来日中、実の多くの少年少女の頭を撫でてあげた。最後に撫でたの、誰だと思う？

荒木 え、クイズですか？

田辺 あ、やな予感。

荒木 えっ？

桑木 そう。僕の息子なんだよ、9歳の。

荒木 子連れだったんですか？

桑木 きつと務は…ああ、息子の名前なんだけどね。

荒木 それは判ります。

桑木 きつと勉の頭蓋には、天才学者の電流がビビビッて走ってだねえ…

常川 あの桑木先生。

常川入室。まだビビビを続けている桑木。

常川 桑木先生。

桑木 ああ、何？

常川 西田先生が研究室で待ってるそうです。

桑木 ああ、そう…おつかしいなあ、石原さん。

田辺 ホントにご一緒だったんですか？

桑木 ホントだよ。だって博士見送りの報告なんだもん。ちゃんと校門を一緒にくぐって…

常川 道に迷われたかな。

田辺 まさか…ま、とりあえず先に行きませんか？ 僕も立会いますから。

桑木 そうお…じゃ、ま、行くかな。

田辺 まだいるだろ？

常川 ええ。

荒木 はい。

田辺 じゃあ待ってて、正月空けの件もあるから。

荒木 はい。

自慢話の続きをしながら奥へ去る桑木と田辺。

荒木 正月はどうするの？

常川 別に。

荒木 そっか、初詣でも行くか？

常川 家族と行けよ。俺は寝てる。

荒木 そう…聞いたよ、宮崎さん。

常川 うん。

荒木 2月から編入だつて？

常川 うん。寺田さんに迷惑かけなきやいいけどね。

荒木 …常川、お前もしかして…

常川 違うよ。それに…喋ったらすつきりした。

荒木 喋ったって本人に。

常川 うん。返事はいらなくて言ったし。実際聞きたくなかったし。

荒木 そう。…そっかあ。

石原 どうもども…

通路側から控えめな石原が入室。

荒木&常川 ああ、石原先生。

石原 しー。…君たちだけだよ。

常川 ええ、たった今桑木先生が西田教授に…

石原 OK, OK。…それと先生は止めてね。

常川 はあ…

荒木 え、でもいいんですか？ 博士見送りの報告でしょ？

石原 僕はいいよ。それにずっと桑木さんの自慢話聞いてたら、体調悪くなっちゃって……

荒木 ああ、判ります。

石原 それに、まあ……ココも見納め。

荒木 ……そうなんですか？

石原 短かったなあ43日間。あつという間だったよ。

常川 僕は長かったです。

石原 えっ？

この辺りでキョウコが入室。ESの残したコートをはおり、帽子を被っている。

荒木 ああ、まあ、相対性って事で……ああ、そう。先日はお世話になりました。奈良ホテル。

石原 ああ、良かったね。田辺さんの頑張りだよ。

荒木 はい。最高の思い出です。

石原 うん。「哲学も宗教も、これからは科学を無視して論ぜれなくなった」。あれは響いたなあ。

荒木 ええ。……あ、で、結局真相は判りました？ 博士の空白の1時間。

石原 ああ、ココでのね。それがさあ、結局知るは博士のみって感じでね。港でも見送り直前に聞いてみたんだよ。そしたらさあ……

荒木 ええ。

石原 「あの夜は神様と一緒にサイコロを振ってたんだ」って、それだけ。

常川 何ですそれ？

荒木 あ、でも神のサイコロって……

石原 うん、口癖だよねえ。観測者の都合を否定したり、偶発性の議論が出た時に「神はサイコロを振らない」って、強い口調で。

荒木 ですよねえ……どういう事だ？

常川 あの、先生。

石原 や、だから……

常川 石原さん。

石原 ……はい……

常川 ……思い通りには行かないものですね、人生は。

石原 ……(微笑んで) そうね。

常川 飲みに行きましょう。

石原 おう。行こう行こう。

常川 あ、でもまだ行けません。

石原 なんだそうなの？……あ、じゃあ(窓際のフラスコを指して)一杯もらっていい？

荒木 こんなもので良ければ、ああ湯飲みを……

石原 いいからいいから。これが好きなのよ。

フラスコからビールカーに、コーヒーを注ぐ石原。

石原 ああ、そうそう。君たち宮沢賢治って知ってる？

常川 いえ……物理の人ですか？

石原 や、東北の……花巻だったかな？ なかなか素敵な詩を書いてるらしい。僕の知り合いが作りたてのものを送ってくれたんだけど……

ポケットから紙を出す石原。体を止めるキョウコ。

石原 ま、まだ草稿って奴だな。じゃあ……荒木君。

荒木 えっ？ 僕ですか……

常川 じゃあココで。

椅子を動かす常川。紙を受け取り、ゆっくり椅子に立つ荒木。

荒木 なぜ人は、こんなに透きとおって綺麗な気層の中から、燃えて暗い悩ましいものをつかまへるのか？ 信仰でしか得られないものを、なぜ人間の中でしっかりと捕らへえようとするのか？……

キョウコ&荒木 ……もうそんな宗教風の恋をしてはいけない。そこはちようど両方の空間が二重になっているところで、俺たちのような初心のものに、居られる場所では決してないのだ……

上記のセリフ中に、じわりと照明変化。キョウコ以外は静かに動き

を止める。椅子からゆっくり立ち上がるキョウコ。

**キョウコ** …なぜ人は、こんなに透きとおって綺麗な気層の中から、燃えて暗い悩ましいものをつかまへるのか？ 信仰でしか得られないものを、なぜ人間の中でしっかり捕らへえようとするのか？…もうそんな宗教風の恋をしてはいけない。そこはちやうど両方の空間が二重になっているところだ…

キョウコだけが朗読を繰り返す中、やがて闇。

終焉。

◆主たる参考および引用図書◆

「アインシュタイン・シヨック Ⅰ・Ⅱ」

金子務著

岩波現代文庫

◆その他の参考図書◆

「相対性理論」

A・アインシュタイン著／内山龍雄訳

岩波文庫

「原阿佐緒」

大原富枝著

講談社

「相対性理論を楽しむ本」

佐藤勝彦著

PHP文庫

「春と修羅」

宮沢賢治著

日本図書センター

\*ほか多数の原爆に関する書物、ウェブサイトの情報などなど。